

続石遺跡発掘調査報告書

太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査

2019. 10

岩手県洋野町教育委員会

続石遺跡発掘調査報告書

太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査

2019. 10

岩手県洋野町教育委員会

序

洋野町は岩手県の最北端に位置し、北は青森県三戸郡階上町、西は軽米町、南は久慈市、東は太平洋に接し、海と高原に囲まれた自然豊かな町です。平成18年1月1日、旧種市町と旧大野村が合併して洋野町が誕生しました。

町内には現在219箇所の遺跡が登録されています。先人の残したこれらの文化遺産を保護し、保存していくことは私たち町民に課せられた重大な責務であります。

本報告書は、太陽光発電所建設工事に伴う統石遺跡の埋蔵文化財調査の報告をまとめたものです。この調査の結果が今後この地域の歴史を解明する上で、いささかでもお役に立てれば幸いです。また、本書が関係者はもちろん、広く町民の方々に活用され、埋蔵文化財に対する理解と保護に多少なりとも寄与されることを願っております。

最後になりましたが、発掘調査及び報告書作成にあたり、多大なご助言ご協力をいただきました関係者の方々に厚く御礼を申し上げます。

令和元年10月

洋野町教育委員会

教育長 林 剛敏

例　　言

1. 本報告書は、岩手県九戸郡洋野町種市第4地割 99番1に所在する、続石遺跡発掘調査結果を収録したものである。
2. 本遺跡の岩手県遺跡台帳における遺跡番号は、IF79 - 0012である。
3. 本遺跡の調査は、太陽光発電所建設に伴う事前の緊急発掘調査であり、調査に係る費用は事業主にご負担いただいた。事業主は下記の通りである。
合同会社洋野種市代表社員合同会社R J キャピタル
4. 本遺跡の発掘調査は、洋野町教育委員会が主体として実施したもので、株式会社シン技術コンサルが調査支援業務を行った。
調査責任者：千田政博
調査員：吉澤 学、成田 典信（株式会社シン技術コンサル）
5. 調査指導 岩手県教育委員会事務局生涯学習文化財課
6. 自然科学分析については、パリノ・サーヴェイ株式会社に依頼した。その成果は、本書第V章に掲載した。
7. 本書の編集・構成は吉澤が行い、執筆については第I・III章を千田、第II・IV・VI～VII章を吉澤が担当した。
8. 第III章洋野町内の遺跡については、平成31年（2019年）4月時点での「岩手県遺跡台帳」に基づくものである。
9. 野外調査、資料収集及び本報告書の作成等に際して、下記の方からご指導、ご助言、ご協力を賜った。記して感謝申し上げます。（敬称略）
藤田亮一、有限会社薩摩建設
10. 発掘調査作業においては、下記の方々にご協力いただいた。（五十音順、敬称略）
伊藤洋子、大畑みどり、金濱美総子、田中セイ、東山ウタ子、東山良子、松倉怜子、村山レイ
11. 室内整理、報告書作成にあたって、下記の方々にご協力いただいた。（五十音順、敬称略）
伊藤恵美子、高橋敦子、吉田順子
12. 調査で得られた諸記録等については、洋野町教育委員会で保管、管理している。
13. 引用・参考文献については文末に収めた。

目 次

序
例言
目次
凡例

本 文

I . 遺跡の概要と調査に至る経過	3
1 . 遺跡の概要	3
2 . 調査に至る経過	3
II . 調査の概要	4
1 . 野外調査について	4
2 . 室内整理について	5
III . 洋野町内の遺跡	5
IV . 遺跡の土層序	18
1 . 位置と地形・地質の概要	18
2 . 層序	18
V . 統石遺跡の自然科学分析	20
1 . 焼土遺構の分析	20
2 . 土層序の分析	22
VI . 検出された遺構と遺物	31
1 . 堅穴住居跡	31
2 . 土坑	33
3 . 溝状土坑	38
4 . 性格不明遺構	40
VII . 遺構外出土遺物	40
1 . 繩文土器	40
2 . 土製品	42
VIII . 調査のまとめ	44
1 . 遺構と遺構内出土遺物	44
2 . 遺構外出土遺物	45
3 . まとめ	45

表

第1表 町内の遺跡一覧(1) ······	12	第2表 植物珪酸体分析結果 ······	22
第1表 町内の遺跡一覧(2) ······	13	第3表 テフラ分析結果 ······	24
第1表 町内の遺跡一覧(3) ······	14	第4表 1号堅穴住居跡付属ピット一覧 ······	31
第1表 町内の遺跡一覧(4) ······	15	第5表 土器觀察表(1) ······	42
第1表 町内の遺跡一覧(5) ······	16	第5表 土器觀察表(2) ······	43

図 版

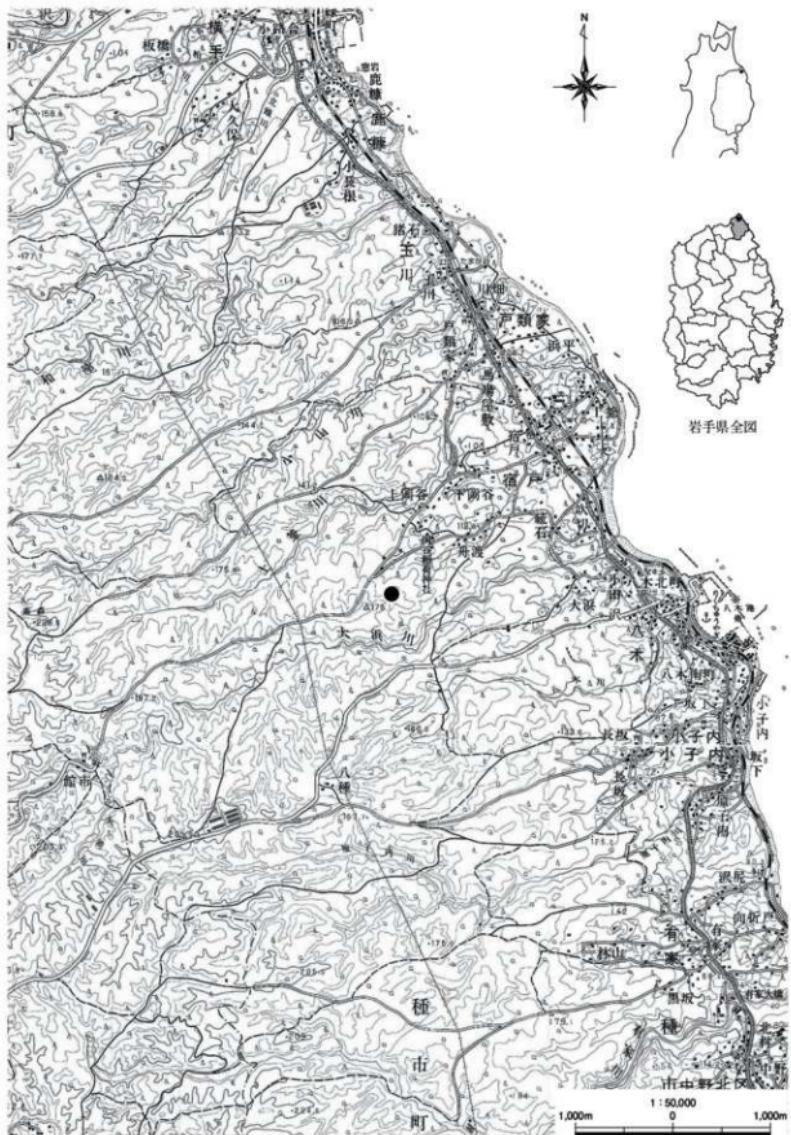
第1図 遺跡位置図 ······	1	第11図 各調査区造構配置図(2) ······	30
第2図 遺跡範囲図 ······	2	第12図 1号堅穴住居跡・出土遺物 ······	32
第3図 町内遺跡位置図 ······	11	第13図 土坑SK1～SK3・出土遺物 ······	34
第4図 深掘土層序 ······	19	第14図 土坑SK4～SK6・出土遺物 ······	35
第5図 植物珪酸体・薄片顕微鏡写真 ······	21	第15図 土坑SK7～SK11 ······	37
第6図 火山ガラスの屈折率 ······	23	第16図 溝状土坑TP1～TP3 ······	39
第7図 テフラ顕微鏡写真 ······	25	第17図 溝状土坑TP4 ······	40
第8図 大グリッド設定図 ······	27	第18図 造構外出土遺物 土器第I・II群 ······	41
第9図 中・小グリッド設定図、調査区配置図 ······	28	第19図 造構外出土遺物 土器第III群、土製品 ······	42
第10図 各調査区造構配置図(1) ······	29		

写真図版

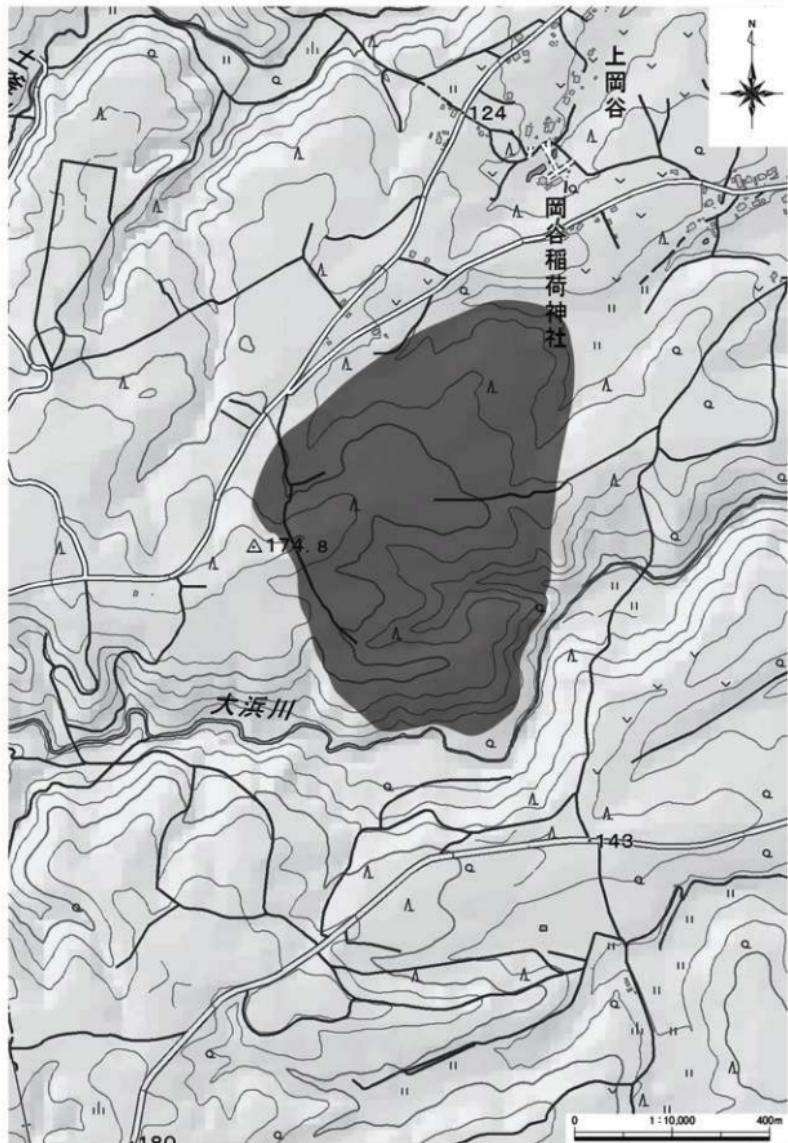
写真図版1 調査地遠景 ······	49	写真図版10 土坑SK2～SK4 ······	58
写真図版2 調査地近景 ······	50	写真図版11 土坑SK5～SK9 ······	59
写真図版3 調査区全景(1) ······	51	写真図版12 土坑SK10・SK11 ・土坑出土遺物 ······	60
写真図版4 調査区全景(2) ······	52	写真図版13 溝状土坑TP1～TP3 ······	61
写真図版5 深掘土層序 ······	53	写真図版14 溝状土坑TP4・性格不明造構SX1 ・造構外出土遺物 ······	62
写真図版6 1号堅穴住居跡(1) ······	54		
写真図版7 1号堅穴住居跡(2) ······	55		
写真図版8 1号堅穴住居跡(3) ······	56		
写真図版9 1号堅穴住居跡(4) ・土坑SK1・SK2 ······	57		

凡　　例

1. 遺構図版の縮尺は、全て 1/60 で統一した。
2. 本書で使用する遺構表示記号は、下記の通りである。
SI：竪穴住居跡 SK：土坑 TP：溝状土坑 SX：性格不明遺構
3. 各遺構内の層位には、算用数字を使用した。
4. 本報告書に収載した遺構実測図に付した方位は、国家座標第X系による座標北を示す。
5. 第1図 遺跡位置図及び第2図 遺跡範囲図は、国土地理院発行の 25,000 分の 1 の地形図、第3図 町内遺跡位置図には 50,000 分の 1 の洋野町管内図を複写して使用した。
6. 遺物図版の縮尺は、土器 1/3、土製品 1/2 で統一した。
7. 遺構実測図で使用したスクリーントーンの用例は、下記の通りである。
 焼土範囲  柱穴底面変色範囲
8. 遺構写真図版は、縮尺不定である。掲載順は、遺構図版と同一である。
9. 遺物写真については、土器 1/3、土製品 1/2 で統一した。
10. 遺物観察表の法量について、推定値は < > で表示した。



第1図 遺跡位置図



第2図 遺跡範囲図

I . 遺跡の概要と調査に至る経過

1. 遺跡の概要

統石遺跡は、JR 八戸線種市駅から南へ 6.5km、太平洋岸から南西 2.5km、北緯 40° 21' 04" 東経 141° 43' 31" を中心に位置する。未周知の埋蔵文化財包蔵地であったが、太陽光発電所建設工事に伴い実施された埋蔵文化財確認試掘調査によって新規に発見された遺跡である。

試掘調査では、縄文時代後期の竪穴住居跡、溝状土坑（陥し穴状遺構）、土坑等の遺構が検出されている。遺物は貝殻文が施された早期及び後期の縄文土器、土製品、石器が出土している。また、本遺跡からは縄文時代と平安時代の製塩関連遺物が出土している。縄文時代のものは、海水を煮詰める煎熬工程に使用されたとみられる深鉢型土器の胴部片で、薄手で無文のもののはかに羊齒縄文や斜縄文が施文されたものもあり、いずれも変色や付着物がある。平安時代のものは土製支脚の破片が出土している。筒型の中空タイプで、底面付近の部位であるとみられる。

遺跡の種別は縄文時代の集落跡、狩猟場跡、散布地として登録されている。

2. 調査に至る経過

本発掘調査は太陽光発電所建設に伴い実施されたものである。その経緯であるが、平成 28 年 11 月 17 日付けの文書により、事業者から建設予定地内における埋蔵文化財包蔵地の所在について照会があり、分布調査を実施した結果、周知の埋蔵文化財包蔵地ではなかったものの、事業地の面積が広大なため、試掘調査が必要であるとの回答を行った。その後平成 29 年 3 月 2 日、事業者から試掘調査依頼書の提出があり、事業地である 222518 m² を対象に埋蔵文化財確認試掘調査を実施した。その結果、遺構、遺物を確認したため、新規発見遺跡として平成 29 年 6 月 29 日付けで文化財保護法第 97 条第 1 項の規定による書類を提出した。その後平成 29 年 7 月 31 日、事業者から事業地をさらに 161,297 m² 拡大するため、追加の試掘調査依頼書が提出された。平成 29 年 10 月 17 日～12 月 26 日まで追加の試掘調査を実施した結果、遺構、遺物を確認し、事業地内全域に遺構が所在することが明らかとなった。当初の事業計画では事業地を造成して太陽光発電所建設工事を行う予定であったが、事業地全域の本発掘調査が必要になったことから、事業者、岩手県教育委員会、洋野町教育委員会の三者で建設設計及び埋蔵文化財の取扱いについて協議を重ね、パネルの設置工法の変更により全面調査を回避することとした。しかし、調整池の位置は変更できず、掘削工事が必要であることから、調整池部分を発掘調査することとなった。

平成 31 年 1 月 25 日、事業者から文化財保護法第 93 条第 1 項の規定により届出に係る進達依頼が洋野町教育委員会へ提出された。その後平成 31 年 1 月 31 日の教生第 33 - 436 号により、岩手県教育委員会教育長より発掘調査を実施するよう通知がなされ、同年 3 月 27 日、事業者から埋蔵文化財発掘調査の依頼書が洋野町教育委員会へ提出された。平成 31 年 4 月 4 日より本発掘調査に着手し、同月 26 日まで調査を実施した。

II. 調査の概要

1. 野外調査について

野外調査は、調整池造成部分の約2000m²の範囲を対象に実施した。試掘調査で遺構が確認された地点を任意の範囲で拡幅し、遺構全体を検出した。拡幅時に新規で遺構が確認された場合も、その全体検出に至るまで拡幅を継続し、結果的に9箇所の小規模な調査区が対象地内に設定された。

グリッド設定については、まず遺跡地全体に100m方眼の大グリッドを被せた。設定は南西隅を起点とし、世界測地系に基づく平面直角座標第X系を使用してX = 38800.000m・Y = 75400.000mに原点を置いた。ここから北方向(X軸)へA～Jのアルファベットを、東方向(Y軸)へ0～11の算用数字を与え、両者の組み合わせでグリッド名を付した(A0～I11)。大グリッド内の細分にあたってはまず20m方眼の中グリッドで25分割し、さらにこれを4m方眼の小グリッドで25分割した。なお、中グリッド名はa～yのアルファベットで、小グリッド名は1～25の算用数字で示した。これら大～中～小グリッド名を併記し、最終的なグリッド名とした。

9箇所設定された調査区は、このグリッド設定に基づきそれぞれに名称を与えた。ただし、いずれの調査区も複数のグリッドに跨るため、主要範囲に相当する部分のグリッド名を使用した。各調査区の概要は、下記の通りである。(調査着手順に記載)

G8 - b - 21 グリッド	面積: 65.7m ²	検出遺構: 土坑1基 (SK1)
G8 - i - 11・16・17 グリッド	面積: 85.0m ²	検出遺構: 墓穴住居跡1棟 (SII)・土坑4基 (SK2～5)
G8 - x - 2 グリッド	面積: 48.9m ²	検出遺構: 土坑1基 (SK6)・溝状土坑1基 (TP1)
H8 - e - 6 グリッド	面積: 46.6m ²	検出遺構: 溝状土坑1基 (TP2)
H8 - s - 10 グリッド	面積: 37.0m ²	検出遺構: 土坑2基 (SK7・8)・性格不明遺構1基 (SX1)
H8 - i - 24 グリッド	面積: 40.7m ²	検出遺構: 土坑2基 (SK9・10)
H8 - h - 19 グリッド	面積: 30.7m ²	検出遺構: 溝状土坑1基 (TP3)
H8 - f - 8 グリッド	面積: 38.0m ²	検出遺構: 土坑1基 (SK11)
H7 - e - 3 グリッド	面積: 55.2m ²	検出遺構: 溝状土坑1基 (TP4)

具体的な調査の手順は、まず拡幅時の表土除去をバックホウ(バケット土量0.45m³)で行い、調査区の壁をスコップで整形、同時に鋸・剪定鉄などを用いて樹木根を除去した。引き続き彌縫・両刃鎌で平面精査を行い、遺構を検出した。遺構の検出は、後述する基本土層序の第Ⅲ層もしくは第Ⅳ層上面で行った。

遺構の精査については、堆積土を2分割で半截し、その堆積状況を観察・記録した上で完掘した。分層は堆積層位の逆順で算用数字を付し、注記は『標準土色帖』に即して記録した。

測量については、平面・断面図とともに株式会社シン技術コンサル製「遺跡管理システムⅡ」を用いてトータルステーションによる機械測量で対応した。記録写真については、35mmフィルムカメラ(モノクロネガ)を主に用い、補足として35mmデジタルカメラも併用した。

全ての遺構調査が終了した後は、無人航空機(ドローン)による空中撮影を行い、遺跡地の周囲を含めた広範囲の撮影に努めた。

2. 室内整理について

野外調査終了後、出土遺物を含む記録を整理し、発掘調査報告書の編集作業を行った。出土遺物については、水洗後注記作業を行い、出土グリッド・遺構の仕分けを経て接合作業を行った。土器については全て破片資料であったため接合率が低く、器形復元が可能な資料は得られなかつた。結果的に31点を掲載用遺物として選別し、登録作業後、実測及び拓影、トレース、写真撮影を順次行った。

野外調査で撮影したフィルム写真は、現像後アルバムに収納し、撮影記録の記入を行つた。デジタル写真についてはファイル名のリネーム、コンタクトシートによる出力をを行つた。

遺構図面については「遺跡管理システムⅡ」で第一原図を編集し、データ変換後、報告書掲載用の図として第二原図の編集を行つた。

これらの作業と並行して原稿執筆・挿表作成を行い、完成した個々の挿図や調整済の画像等を併せて報告書を編集した。なお、図化・編集作業に使用したソフトは下記の通りである。

Adobe 社製 「Illustrator CC2019」 遺物図トレース・遺構第二原図編集

「Photoshop CC2019」 拓本画像調整・掲載用各写真画像調整

「InDesign CS6」 版組・編集

III. 洋野町内の遺跡

洋野町内に所在する遺跡は、平成31年（2019）4月現在、岩手県遺跡台帳に219遺跡が登録されている。平成23年（2011）以降、三陸沿岸道路建設や再生可能エネルギー事業等に係る試掘調査により新規発見の遺跡が増加している。

町内遺跡詳細分布調査は、旧種市町が行った平成16年度（2004）の角の浜・伝吉・平内・麦沢（姥沢）地区の分布調査のみである。旧大野村分についても実施しておらず、町内には未発見の遺跡が多く所在するものと想定される。町内の発掘調査は岩手大学草間俊一教授により昭和30年（1955）から昭和36年（1961）にかけて遺跡の踏査と発掘調査が行われたのが最初であるが、その後平成25年度（2013）までの調査事例は数件にとどまっていた。平成26年度（2014）以降、三陸沿岸道路建設等に伴う本発掘調査により調査事例が急激に増加したものとの、町内に所在する遺跡の様相については不明な部分が多い。

旧石器時代の遺跡の登録はないが、「角川日本地名大辞典3」によると、旧石器遺物出土遺跡として鉄山遺跡（大谷鉄山か？）、有家遺跡（上のマッカ遺跡か？）が紹介されている。和座川上流の海岸段丘上に立地する鉄山遺跡から石刃・剥片・敲石が出土、海岸段丘上に立地する有家遺跡から石斧・剥片が出土し、いずれも高館火山層最上部から発見されたとある。しかし、遺跡の名称は現在登録されているものに該当せず、詳細は不明である。縄文時代の遺跡数は、全体の7割以上を占める。草創期の遺跡は現在のところ登録はないが、洋野町境から3kmの青森県三戸郡階上町大字平内にある滝端遺跡では爪形文土器が出土している。また、階上町に隣接する八戸市南郷区黄槻遺跡、洋野町に隣接する軽米町馬場野II遺跡でも草創期の土器が出土していることから、町内からも出土する可能性がある。

早期の遺跡として、ゴッソー遺跡（20）、大宮II遺跡（47）、大宮I遺跡（48）、宿戸遺跡（199）、中野城内遺跡（203）などがある。大宮遺跡は、昭和36年（1961）に草間教授により発掘された遺跡で、A・B・Cの3地区に分けて調査が行われ報告されている。A・B遺跡からは貝殻文土器が出土しており、特にB遺跡からは胴

部に貝殻条痕、口唇部に貝殻腹縁文の尖底土器が出土している。草間教授は、岩手県で初めて復元された貝殻文の尖底土器であり、発見されたことは多大な成果であると報告している。ゴッソー遺跡では岩文振埋文による平成6年度（1994）の発掘調査で、遺構には伴わないが日計式土器、魚骨回転文土器、寺の沢式土器等が出土している。中野城内遺跡は、三陸沿岸道路建設事業に伴い、岩文振埋文により平成29年度（2017）に調査が行われた。調査の結果、早期とみられる土坑、白浜式土器が出土している。

前期の遺跡として、ゴッソー遺跡（20）、上のマッカ遺跡（43）、北ノ沢I遺跡（163）、小田ノ沢遺跡（200）などがある。ゴッソー遺跡は早期～晩期の繩文土器が出土しているが、前期初頭の遺物量が多く、特に平成6年度（1994）の岩文振埋文による本発掘調査で出土したコンバス文土器や押型文土器は岩手県で初めての出土と考えられる。同遺跡もやはり昭和36年（1961）に草間教授により発掘された遺跡で、繩文時代前期の土器を中心には繩文時代早期の土器、弥生時代の土器、土師器片、石器を採取したとの報告がある。なお、上のマッカ遺跡は昭和36年（1961）草間教授の調査により、貝塚が存在する可能性が指摘されている。

中期の遺跡として、千敷平遺跡（4）、ゴッソー遺跡（20）、上のマッカ遺跡（43）、北ノ沢I遺跡（163）などがある。平成27年度（2015）洋野町教育委員会によるゴッソー遺跡の本発掘調査では、中期初頭の堅穴住居跡が1棟発見され、三重の入れ子にした土器埋設炉と単体の土器埋設炉が並列した状態で検出された。その入れ子の土器埋設炉の中からヒエの胚乳が検出された。

後期の遺跡として、平内II遺跡（65）、上水沢II遺跡（92）、西平内I遺跡（185）、南川尻遺跡（194）、サンニヤI遺跡（195）、北鹿糠遺跡（196）、下向遺跡（202）、サンニヤIII遺跡（218）などがある。町内の繩文時代の遺跡で、後期前葉に位置付けられる遺跡が一番多く、その中でも溝状土坑（陥し穴状遺構）と遺構外から後期前葉の土器が出土する遺跡が多数を占める。平内II遺跡は洋野町教育委員会により、平成11年度（1999）から平成25年度（2013）の間、延べ6箇年発掘調査が行われた。屋外炉、集石、焼土遺構、溝状土坑が検出されており、出土した土器は主に後期前葉に位置付けられるものである。上水沢II遺跡は平成12年度（2000）に岩文振埋文により本発掘調査が行われ、後期前葉から後葉の堅穴住居跡が11棟発見された。

なお、三陸沿岸道路建設事業に伴い発掘調査が行われた遺跡で、後期に属する堅穴住居跡が検出された遺跡は、西平内I遺跡（185）、南川尻遺跡（194）、サンニヤI遺跡（195）、北鹿糠遺跡（196）、南鹿糠I遺跡（206）があり、南川尻遺跡は後葉、それ以外は前葉のものである。

晩期の遺跡として、たけの子遺跡（21）、大平遺跡（32）、ニサクドウ遺跡（58）、戸類家遺跡（61）、田ノ沢遺跡（63）などがある。特にたけの子遺跡は町内で晩期を代表する遺跡である。昭和36年度岩手県遺跡白帳作成調査において、戦争中開墾の際多数の土器が出土し、現在は植林されており包含層は良好で重要な遺跡であるとの報告がある。洋野町立種市歴史民俗資料館収蔵の考古資料の多くはこの遺跡からの出土である。戸類家遺跡は昭和32年（1957）に慶應大学江坂輝彌氏により発掘調査が行われており、土器、石器の他に土偶が出土している。この時の土偶は現在慶應義塾大学考古学研究室に収蔵されている。また、昭和7年（1932）には岩手県史跡名勝天然記念物調査会委員であった小田島禄郎氏が同町を訪れており、その時に採集された田ノ沢遺跡、八木貝塚の出土遺物が岩手県立博物館に収蔵されている。

なお、貝塚遺跡としてホックリ貝塚（33）、八木貝塚（37）、小子内貝塚（40）、黒マッカ貝塚（41）がある。ホックリ貝塚からは岩手県で初めて繩文時代の製塙土器が出土しており、久慈市の大芦I遺跡で平成9年（1997）に発見されるまで、製塙土器が発見された県内唯一の遺跡であった。海岸付近に位置する同貝塚は、昭和24年（1949）に行われた造船所の建設工事によりほぼ壊滅したとみられ、製塙遺跡であった可能性がある。洋野町の故玉沢重作氏により製塙土器が発見され、その後岡山大学名譽教授近藤義郎氏が、芹沢長介氏、伊東信雄氏、江坂輝彌氏から情報を得て昭和35年（1960）同遺跡を調査し、土器の検討を行っている。このほか繩文時代の製塙土器は、ゴッソー遺跡の平成12年度（2000）岩文振埋文による本発掘調査でコンテナ1箱分出土している。洋野町立種市歴

史民俗資料館には、たけの子遺跡で採取された縄文時代の製塩土器片が多数収蔵されている。また、平成 16 年度（2004）の種市町内遺跡詳細分布調査において、南平内 I 遺跡（182）より製塩土器片が晩期の縄文土器とともに発見された。同遺跡は現在の汀線まで約 150m の距離であるが、時代によっては汀線付近であった可能性もある。遺跡の残存状況も良くないため詳細は不明であるが、位置から推測すると製塩を行った遺跡であることも考えられる。

弥生時代の遺跡として、大平遺跡（32）、大宮 II 遺跡（47）、大宮 I 遺跡（48）、平内 II 遺跡（65）、上水沢 II 遺跡（92）などがある。先述した平内 II 遺跡では、平成 25 年度の調査で弥生時代後葉の堅穴住居跡が 2 棟検出されている。上水沢 II 遺跡では弥生時代後葉の堅穴住居跡が 1 棟検出され、土器がコンテナ約 1 箱分出土している。なお、西平内 I 遺跡では、沈線間に交互刺突文を有する弥生時代後葉の土器片が出土している。

古墳時代の遺跡については集落遺跡の確認はないが、袖山遺跡（38）において、劍形の石製模造品が表面採集されている。同品もまた故玉沢重作氏により発見されたもので、長さ 4.2cm、最大幅 1.5cm、厚さは最大で 4mm、重さは 3.6g、石材は北上山地が産出地の蛇紋岩で、色調は暗緑灰色である。茎の表現が簡略化された二等辺三角形に三角形を付加した形状で、全体が丁寧に研磨されて、頭部には垂下孔とみられる径 2mm の穿孔があり、表面は鏡が表現されている。形状から 5 世紀後葉より古い可能性がある。袖山遺跡は標高約 50m の海岸段丘上に立地し、現状は山林などで、主な時代は縄文時代であるが、石製模造品の他には当該期の遺物は発見されていない。昭和 28 年（1953）に東北大学伊東信雄教授が東北地方の石製模造品の集成を行い発表した「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」により同品が紹介され知られるようになった。この石製模造品も岩手県で初めて発見されたもので、昭和 58 年（1983）に一戸町馬場平遺跡から劍形の石製模造品が発見されるまで県内唯一のものであった。

奈良・平安時代の遺跡として、城内遺跡（11）、ニサクドウ遺跡（58）、八森遺跡（73）、サンニヤ II 遺跡（205）、南鹿鳴 I 遺跡（206）などがある。サンニヤ II 遺跡では、三陸沿岸道路事業に伴い平成 26 年度（2014）・27 年度（2015）の岩手県教育委員会による発掘調査で、8 世紀後半から 9 世紀前半の時期の堅穴住居跡が 3 棟検出されている。また、国道 45 号線種市登坂車線整備事業に伴い、岩文振埋文により平成 28 年度（2016）に調査が行われた、八森遺跡でも 8 世紀代の堅穴住居跡が 1 棟検出されている。城内遺跡からは 8 世紀代と考えられる土師器の長胴甕、球胴甕、瓶、土師器壺が出土している。なお、草間教授の報告書によるとニサクドウ遺跡で土製支脚、土師器壺が出土している。

二十一平遺跡（69）では古代（平安時代）の製塩土器が出土している。同遺跡は岩手県と青森県境を流れる二十一川の南側の汀線付近に位置する。海岸整地に伴う重機の掘削により遺跡の存在が明らかになり、平成 15 年度（2003）に新規登録された。製塩土器片、土製支脚片が多量に散布し、被熱したような円窓もみられた。現在までにコンテナで約 5 箱分が採取されている。遺跡の立地、発見された遺物の状況から製塩を行った可能性が高いが、保存状況は重機の掘削により一部破壊されていると考えられる。また、未登録の遺跡ではあるが、勝木野智寛氏、相原淳一氏による古津波堆積層の調査に伴い海岸付近で採集されている製塩土器もある。なお、古代の製塩土器は海岸から 6.2km の館野遺跡（207）でも採集されており、町内には縄文時代や古代の製塩土器、土製支脚を伴う遺跡が多く所在することが予想され、製塩遺跡の発見や製塩土器の資料の増加が見込まれる。

中世の遺跡として中世城館跡の分布調査が昭和 59 年（1984）に岩手県教育委員会により行われており、岩手県遺跡台帳には 28 遺跡が登録されているが、ほとんどが城主などの詳細が不明である。

種市の域内地区には種市氏の居城である種市城跡が所在する。種市氏は中世～近世初期に当地方を領有していた三戸南部氏（後の盛岡南部氏）の家臣である。「南部藩参考諸家系図」（以後系図）によれば、種市中務（実名不詳）が三戸南部氏 24 代晴政から種市村、蛇口村（軽米町）ならびに傍村賜り種市村に居住したとある。およそ 16 世紀半ば頃と推測されるが、それ以前のことは不明である。「奥南田指録」には、三戸南部氏 25 代晴継の股肱の臣

として中務が久悲備前らと名を連ねており、三戸南部氏の有力家臣であったとみられる。系図によると、種市中務の長男光徳は同じく中務と称した。光徳は三戸南部氏26代信直（初代盛岡藩主）から種市村ならびに物村に600石を賜ったとある。『聞老遺事』によると、天正19年（1591）九戸政実の乱の際、信直方に属し18人の部下と鉄砲三挺、弓三張で参陣している。また、2代盛岡藩主利直の時に起きた慶長5年（1600）の岩崎合戦では、部下18人と参陣している。なお、系図には光徳の妻は根城南部氏（後の遠野南部氏）18代八戸政栄の弟新田政盛の娘であることが記されている。

その後光徳の長男孫三郎が家督を継いだ。『聞老遺事』によれば大阪の夏の陣に出陣している。光徳と孫三郎父子は、初代盛岡藩主信直、2代盛岡藩主利直父子に仕え活躍した家臣であったが、孫三郎は3代盛岡藩主重直の時、罪ありということで禄を没収され、慶安2年（1649）に没している。

光徳の次男吉広は系図によれば、天正15年（1587）に初代盛岡藩主信直から閉伊口村（久慈市）を賜り住んでいたが、天正17年（1589）に蛇口村に替地を賜り、蛇口氏に姓を変えている。

岩手県遺跡台帳には、平時居住していた平城の種市城跡（16）と非常に立てこもったとされる山城の種市城跡（17）が登録されている。平城の種市城跡はJR八戸線種市駅より西へ約9kmに所在し、平城跡は現在でも馬場屋敷、的場、神楽屋敷など当時の名残と思われる地名が存在する。そこから南西へ約1kmに山城の種市城跡が位置する。

天正18年（1590）、豊臣秀吉の朱印状により初代盛岡藩主信直が「南部内七郡」を安堵されると、八戸・九戸地方一帯は信直が直接支配することとなり、寛永4年（1627）に根城南部氏が伊達氏に対する備えを理由に遠野へ転封されると盛岡藩の直轄地になった。八戸には八戸城代が配置され、さらに八戸地方には八戸代官、九戸郡には久慈代官を派遣し支配にあたったようである。

寛文4年（1664）9月、3代盛岡藩主重直が跡繼ぎを決めないままに死去した。同年11月、幕府は重直の次弟の重信と末弟の直房を呼び、盛岡藩10万石のうち8万石を重信に相続させ、残り2万石を直房に与え、新規に一藩をおこさせる処置を取った。寛文5年（1665）2月、盛岡藩より領地の配分が行われ、八戸を居城とし、三戸郡41ヶ村、九戸郡38ヶ村、志和郡4ヶ村、都合83ヶ村が付与された。八戸藩は、各村の支配のため通制という行政区画を用い、三戸郡には八戸廻・名久井通・長苗代通、九戸郡には軽米通・久悲通、志和郡には志和の行政区を設定し、各通には代官所を配置した。種市は八戸廻、大野は久悲通に属していた。

八戸藩の主な産業は、商業、林業、漁業、製塩業、鉄産業、造船業などがあり、特に製鉄業は原料である砂鉄と燃料の薪炭材が豊富であったため盛んに行われた。製鉄に関する史料は八戸藩の藩庁の日記である目付所日記、勘定所日記、民間の史料では晴山家文書、淵沢家文書、西町屋（石橋）文書などがあり、様相を知ることができる。製鉄の中心地は大野で、鉄山会所として日払所がおかれ、鉄山支配人が詰めて生産方を指揮した。天保9年（1838）には、大野の鉄山として玉川山、金取山、葛柄山、水沢山、大谷山、川井山、澁山の七山があった。晴山家文書の天保8年（1837）「寛政年中より拾書」は鉄山支配人の経緯が記されているが、晴山文史館から安永7年（1778）に初代晴山吉三郎へ受け継がれ、その後数人の支配人を経て、享和2年（1802）からは飛驒の浜谷（屋）茂八郎が引き継いだ。そして、文政6年（1823）には、鉄山は藩営となり、石橋徳右衛門が支配人に就任して、その下支配人に二代目晴山吉三郎が就いた。さらに天保5年（1834）の百姓一揆後は、軽米の淵沢円右衛門が支配人を命じられ、天保9年（1838）からは江戸の美濃屋宗（惣）三郎（家臣名金子丈右衛門）へと移った経過が記されている。

近世の遺跡として町指定史跡の有家台場（46）がある。目付所日記によると、八戸藩では幕府から異国船警戒の命を受けて、寛政3年（1791）に鉄砲堅・目付御用掛を任命し、異国船の警戒に当たらせたようである。寛政5年（1793）の中里覚右衛門書き上げの「堅場」には「大堅」として鮫村、麦生、「小堅」として八太郎浦、湊浦、小船渡浦、有家浦、中野浦の名があげられている。藩の日記などには異国船の出没記録がいくつかあるが、目付

所日記によると文政8年（1825）有家浦の沖合15里に異国船一隻が近寄り、伝馬船二隻を出して上陸の様子をみせたので、弓・鉄砲衆など計34人の藩士が同日に派遣されたことが記されている。その後、安政元年（1854）八太郎・湊場尻・館鼻・塩越・鮫・小船渡・有家・久慈濱に台場が築かれ、有家にも陣屋堅の役人が任命された。有家台場跡の現況は、八戸線の建設工事などで破壊されているものの、保存状況は概ね良好で、盛土遺構の一部が残存している。

当町の特徴を示す製鉄関連の遺跡は、21箇所（旧種市町16箇所、旧大野村5箇所）登録されている。先述した七山の一つである大谷鉄山（26）は大谷地区にあり、鉄山操業により形成された集落とみられ、製鉄に関わった人々の子孫が多く居住している。製鉄関連の遺跡調査については、岩手県教育委員会の製鉄関連遺跡の詳細分布調査において、旧種市町5箇所、旧大野村35箇所の遺跡の所在を確認している。また、元野田村教育長、田村栄一郎氏によるたたら遺跡の踏査によると、旧種市町は鉄山路12箇所の他、密銭場跡や鍛冶場跡など15箇所、旧大野村は42箇所と鍛冶場跡の調査結果報告（1987『みちのくの砂鉄いまいづこ』）がある。鉄滓が採集される遺跡が少なくとも60箇所以上にのぼり、未発見のものも含めると相当数になると考えられる。

なお、三陸沿岸道路建設事業に伴う発掘調査において南八木遺跡（201）で古代～中世の製鉄関連の遺跡が発見された。少なからず近世以前のものも所在することが予想されるが、町内の製鉄関連遺跡を踏査された佐々木清文氏によると、ほとんどが近世のもので、それ以前のものは所在しても少数であろうとのご教示をいただいている。今後製鉄関連の詳細な町内全域の分布調査を行い、製鉄関連遺跡分布図の作成、遺跡の登録作業が必要である。

製鉄以外の金・銀・銅・鉛鉱山のいわゆる非鉄鉱業については、八戸藩の日記類に僅かにみられるが、盛岡藩領に比べ八戸藩領内には大きな金山ではなく、小規模な金山がいくつかあるのみのようである。梅内家文書の慶安2年（1649）の「砂金採取運上金請取状」によると、沢尻、雪畠、小手沢、野そうけ山に金山があったことが記されている。岩手県遺跡台帳には金山跡として、小手野沢金山（14）、ノソウケ金山（23）の2遺跡が登録されている。

＜引用・参考文献＞

草間俊一 1963 「種市の歴史（原始～中世）種市町諸遺跡の調査報告」種市町役場

角川書店 1985 『角川 日本地名大辞典3 岩手県』

田村栄一郎 1987 『みちのくの砂鉄いまいづこ』

伊東信雄 1963 「東北地方に於ける石製模造品の分布とその意義」『歴史第6輯』東北史学会

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集

（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2001 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第357集

岩手県久慈地方振興局久慈農村整備事務所・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター

2002 『上水沢II遺跡発掘調査報告書』 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集

（公財）岩手県文化振興事業団 2015 『平成26年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋II遺跡』

沼袋III遺跡八幡冲遺跡 ほか調査概報（39遺跡） 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集

（公財）岩手県文化振興事業団 2016 『平成27年度発掘調査報告書 サンニヤ遺跡 房の沢IV遺跡 白石遺跡』

ほか調査概報（33遺跡） 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集

国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・（公財）岩手県文化振興事業団 2017 『西平内I遺跡発掘調査報告書』

岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集

- (公財) 岩手県文化振興事業団 2017『平成 28 年度発掘調査報告書 岩洞湖 I 遺跡・柳洞Ⅳ遺跡・八森遺跡
ほか調査概報(28 遺跡)』岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 676 集
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道路事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団 2018『北鹿徹遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 686 集
- 国土交通省東北地方整備局三陸国道路事務所・(公財) 岩手県文化振興事業団 2018『サンニヤ I 遺跡発掘調査報告書』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 687 集
- (公財) 岩手県文化振興事業団 2018『平成 29 年度発掘調査報告書 岩洞湖 I・II 遺跡 和野新聖神社遺跡 北野川遺跡
木戸場遺跡 中野城内遺跡 沼里遺跡 根井沢穴田Ⅳ遺跡 耳取 I 遺跡 千厩城遺跡 ほか調査概報(23 遺跡)』
岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第 692 集
- 岩手県教育委員会 1986『岩手県中世城館分布調査報告書』岩手県文化財調査報告書第 82 集
- 岩手県教育委員会 1998『岩手の貝塚』岩手県文化財調査報告書第 102 集
- 岩手県教育委員会 2006『岩手の製鉄遺跡』岩手県文化財調査報告書第 122 集
- 岩手県教育委員会 平成 28 年 3 月『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成 26 年度 復興関係)』
岩手県文化財調査報告書第 146 集
- 岩手県教育委員会 平成 29 年 3 月『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成 27 年度 復興関係)』
岩手県文化財調査報告書第 149 集
- 岩手県教育委員会 平成 30 年 3 月『岩手県内遺跡発掘調査報告書(平成 28 年度 復興関係)』
岩手県文化財調査報告書第 152 集
- 岩手県種市町教育委員会 2004『平内 II 遺跡発掘調査報告書』種市町埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 岩手県種市町教育委員会 2005『種市町内遺跡詳細分布調査報告書 I』種市町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
- 岩手県洋野町教育委員会 2013『平内 II 遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第 1 集
- 岩手県洋野町教育委員会 2015『平内 II 遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第 2 集
- 岩手県洋野町教育委員会 2017『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』洋野町埋蔵文化財調査報告書第 3 集
- 洋野町 2006『種市町史第六卷通史編(上)』種市町史編さん委員会
- 大野村 2006『大野村誌第二卷史料編 1』大野村誌編さん委員会



第3図 町内遺跡位置図

No.	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺構・遺物	備考
1	IP77-1386	奥浜	かののはま	椎山第 42 地割	縄文	散布地	縄文土器	別記②、範囲変更（平成 23 年度）
2	IP77-2206	伝吉 1	でんきちいち	椎山第 43 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器（前・中・後期）、石斧、石器、石片、石器、石器等	別記②、伝吉遺跡からの名称・範囲変更（平成 23 年度）範囲変更（平成 25 年度）
3	IP78-1066	奥川田 1	かののかわい・ち	椎山第 29 地割	縄文	散布地	縄文土器（前・中・後期）、石斧、石器	別記②、範吉森（アノカ森）遺跡から名称・範囲変更（平成 23 年度）
4	IP77-2234	千代平	せんじだいら	椎山第 48 地割	縄文	集落跡	縄文土器（前・中・後期）、石斧、石器	
5	IP78-0170	平内 1	ひらないいち	椎山第 34 地割	縄文	散布地	縄文土器（前・中期）、石斧	別記②、平内遺跡から名称・範囲変更（平成 23 年度）
6	IP78-1226	南畠	みなみだて	椎山第 28 地割	中世	城郭跡	城郭（破壊）	昭和 59 年度調査
7	IP78-2224	手手	よこて	椎山第 24 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器（晚期）、土器等	範囲変更（平成 23 年度）
8	IP78-2282	ト子の木	とちのき	椎山第 21 地割	縄文	散布地	縄文土器（後・晚期）	
9	IP56-0330	兎巣	あらまき	椎山第 59 地割	縄文、弥生	集落跡	縄文土器（中期）、弥生土器	
10	IP56-0370	八幡堂堂（八幡廬内削）	はちまんどううだて	椎山第 61 地割	中世	城郭跡	単弧、闕跡	昭和 59 年度調査、八幡廬内削名称変更（平成 13 年度）
11	IP57-0086	城内	じょうない	椎山第 56 地割	縄文、古代	集落跡	土器群、灰陶器、土器等	
12	IP57-0429	荒尾敷板（船舟館）	あらおしきだて	椎山第 50 地割	中世	城郭跡	闕跡（破壊）	昭和 59 年度調査
13	IP57-0584	野野原	たののだて	椎山第 50 地割	中世	城郭跡	単弧、闕跡、壁穴	昭和 59 年度調査
14	IP57-0009	小千骨沢金山	こちくさわきんざん	椎山第 51 地割	近世	砂金採取跡	石垣	小千骨山金山（山）の名称変更（平成 13 年度）
15	IP57-0017	土鍋相	どばしたて	椎山第 51 地割	中世	城郭跡	土器群、保水跡	昭和 59 年度調査
16	IP57-1023	椎市城（平城）	たねじょうじょう	椎山第 60 地割	中世	城郭跡	闕跡	昭和 59 年度調査
17	IP57-2023	椎市城（山城）	たねいじょうじょう	椎山第 60 地割	中世	城郭跡	闕跡、平場	
18	IP58-0004	小手野付頭	こてのさわだて	椎山第 51 地割	中世	城郭跡	闕跡、平場	昭和 59 年度調査
19	IP58-0109	飯鍋相	いたばしだて	椎山第 21 地割	中世	城郭跡	単弧、闕跡	昭和 59 年度調査
20	IP58-0341	ゴツツー	ごっそー	椎山第 18 地割	縄文	集落跡、背景風景	堅穴住居跡、扁穴状穴、土器等、縄文土器（早・中期）、石器、石器等	別記幸・串、6. 平成 6 年度・12 年度・27 年度発掘調査
21	IP58-1006	たけの手	たけのこ	椎山第 21 地割	縄文	散布地	縄文土器（後・晚期）、	
22	IP58-1205	大久保	おおくぼ	椎山第 19 地割	縄文、古代	散布地	縄文土器（前・後・後期）、石斧、土器等	
23	IP66-0156	ノソウケ山	のそうけさん	椎山第 70 地割	近世	砂金採取跡	石垣	
24	IP66-0200	小茅牛振（タチコ）	こがようだて	椎山第 70 地割	中世	城郭跡		昭和 59 年度調査
25	IP67-1120	物鬼頭	わぎだて	椎山第 71 地割	中世	城郭跡	単弧、闕跡、平場	昭和 59 年度調査
26	IP67-2146	大谷我山	おおかやつざん	椎山第 73 地割	近世	豊鉱開闢	鉄津	八戸藩大野田鉄山
27	IP69-1094	西の船	にしのふな	椎山第 8 地割	縄文、中世	船着地	縄文土器（後期）、石器、平場	
28	IP69-1157	宿戸船	しゆとふなへだて	椎山第 7 地割	中世	城郭跡	単弧、闕跡、平場	昭和 59 年度調査
29	IP69-2013	西の船	にしのふな	椎山第 7 地割	中世	城郭跡	土器、闕跡、平場	昭和 59 年度調査
30	IP69-2020	西船の岡	にしのふなおか	椎山第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器（晚期）、石器、土器	
31	IP69-2041	上岡谷	かみおかや	椎山第 7 地割	縄文	散布地	縄文土器（後期）	
32	IP69-2380	大平	おおひら	椎山第 3 地割	縄文、弥生	集落跡	縄文土器（後・晚期）、弥生土器	
33	IP69-2399	カツクリ貝塚	ほっくりかいつか	椎山第 2 地割	縄文、古代	貝塚	縄文土器、製陶土器、カキ、ミルクガイ、土加藤	
34	IP77-0209	細折山	ほそざわてつざん	椎山第 74 地割	近世	豊鉱開闢	鉄津	
35	IP77-1627	鳴川山	なるがわのくわざん	椎山第 73 地割	近世	豊鉱開闢	鉄津	
36	IP79-0423	小日の尻掛山	おだののさわてつざん	椎山第 3 地割	近世	豊鉱開闢	鉄津	
37	IP79-0551	八木貝塚	やぎかいづか	椎山第 1 地割	縄文	貝塚	縄文土器（後期）、籠舟	
38	IP79-0573	鶴山	そでやま	椎山第 1 地割	縄文、古墳	集落跡	縄文土器（中・後期）、古墳製造品（古墳時代）	
39	IP79-1245	貞坂	ながりか	小字内第 1 地割	縄文	散布地	縄文土器（後・晚期）	
40	IP79-1358	小字内貝塚	おこないかいづか	小字内第 5 地割	縄文	貝塚	安付貝塚、鉄津、ミルクガイ、イシダク	
41	IP79-2344	黒マツカ貝塚	くろまつかいづか	有家第 2 地割	縄文、古代	貝塚	縄文土器（後期）、石器、土加藤	
42	IP89-0339	向折口	むかいおりど	有家第 3 地割	縄文	集落跡	縄文土器（後期）、石斧	

第 1 表 町内の遺跡一覧 (1)

%	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺物・遺物	備考
43	IP89-0340	上のマツカ	うえのまつか	有家第5地割	縄文	集落跡	绳文土器(前~後期)、石斧、酒器	範囲変更(平成25年度)
44	IP89-0353	有家屋	うげだて	有家第5地割	中世	城廻路	単路、複路(磁器)	昭和59年度調査、範囲変更(平成25年度)
45	IP89-1153	眞毛鹿ヶ山	ましもしかりてつざん	中野第7地割	近世	駿駁関連	鉄器	
46	IG80-0056	有家台場	うげだいば	中野第8地割	近世	駿台場跡	土壠	昭和59年度調査
47	IG80-1006	大宮Ⅲ	おおみやに	中野第2地割	縄文、弥生	散布地	绳文土器(早期)、 弥生土器	
48	IG80-1008	大宮Ⅰ	おおみやいち	中野第2地割	縄文、弥生	集落跡	绳文土器(早・中期)、石神、 弥生土器	
49	IG80-1063	貝原塚	かいわづか	中野第2地割	縄文	散布地	绳文土器	
50	IG80-2004	中野塚(宿原・前田角)	なかのだて	中野第4地割	中世	城廻路	单路、複路(磁器)	昭和59年度調査
51	IG80-0005	敷内塚	ひざづか	中野第11地割	縄文	集落跡	绳文土器	範囲変更(平成25年度)
52	IG80-0085	藤好沢	ふじよしがわ	中野第7地割	縄文	集落跡	绳文土器(前・後期)、 石刀	
53	IF86-1072	アイヌ森	あいのもり	桜市第30地割	縄文、弥生、古代	散布地	绳文土器(前~中期)、 绳文晚期灰陶・先生前器の 土器、石器、土器器	別記事2、流通跡から名称・ 範囲変更(平成25年度)
54	欠番	-	-	-	-	-	-	北ノ沢遺跡登録林頭(範囲・名前変更 のため)
55	IF88-0194	平内里	ひらないさん	桜市第34地割	縄文	散布地	绳文土器(中期)、磨石	別記事2、範囲変更(平成25年度)
56	IF88-1025	右脇	いしきら	桜市第37地割	縄文、古代	散布地	绳文土器(後期)、敲石、 鐵器、土器器	別記事2、範囲変更(平成25年度)
57	IF88-2023	豊削	ひつわり	桜市第30地割	縄文	散布地	石器	
58	IF86-1356	ニサクヅク	にさくどう	桜市第63地割	縄文、古代	散布地	绳文土器(後期)、敲石、 火葬	
59	IF87-2229	高根Ⅰ	たかねいち	桜市第21地割	縄文	散布地	绳文土器	
60	IF87-2279	高根Ⅱ	たかねに	桜市第21地割	縄文	集落跡	绳文土器(中・後期)	
61	IF89-0042	川柳家	へるけ	桜市第11地割	縄文	散布地	绳文土器(後期)、土井	
62	IP89-0113	向山	むかいやま	桜市第6地割	縄文	散布地	绳文土器	
63	IF88-2337	川ノ沢	かわのさわ	桜市第6地割	縄文	散布地	绳文土器(後期)	
64	IP89-0378	向長地	むかひながね	有家第9地割	縄文	散布地	绳文土器	
65	IF88-0017	平内Ⅲ	ひらないに	桜市第43地割	縄文、弥生、 古代	散布地、 防風場跡	壁・住居跡、屋内炉、 土坑、灰坑遺構、敲石、流跡、 鐵器、土器(後期前半)、 中井、小井(後期前半)、 绳文土器(後期後半)、 土器器、石器、石器品、 铁器品、猪骨、猪頭	別記事1・4号、平成11~13年度、 23~25年度木造施設調査、範囲変更 (平成23年度)
66	IP79-0119	大浜	おおはま	桜市第3地割	縄文	集落跡	绳文土器、石器	
67	IP89-1109	里	たで	桜市第7地割	縄文	集落跡	绳文土器(中期)	
68	IP56-2250	大沢	おおさわ	桜市第66地割	縄文	散布地	绳文土器	平成13年度新規発見
69	IP88-0008	二十一平	にじゅういちたい	桜市第41地割	古代	聚落遺構	製陶器、土製瓦器、 土器器	別記事2、平成15年度新規発見、 範囲変更(平成23年度)
70	IP59-2261	玉川Ⅰ	たまがわいち	桜市第13地割	縄文	散布地	绳文土器(早期)	
71	IP59-2268	玉川Ⅱ	たまがわに	桜市第14地割	縄文	散布地	绳文土器(前期)	
72	IP89-1126	馬場	ばば	桜市第7地割	縄文	散布地	绳文土器	平成15年度新規発見、範囲変更 (平成23年度)
73	IP89-0314	八森	はちもり	有家第3地割	縄文、奈良	集落跡	壁・住居跡、绳文土器、 石器、土器器	別記事11、平成16年度新規発見、 範囲変更(平成23年度)、平成28年 度事業実績調査
74	IP86-0118	向田Ⅲ	むかひだに	大野第2地割	縄文	散布地	绳文土器	
75	IP86-0337	向田	むかひだ	大野第23地割	縄文	散布地	绳文土器(後期)、石器	
76	IP86-0444	向田Ⅰ	むかひだい	大野第20地割	縄文	散布地	绳文土器(後期)、石器	
77	IP87-1082	明月坂	あけどだて	大野第29地割	中世	城廻路	单路、土器、複路、平場	昭和59年度調査
78	IP87-2100	森の渡	はのわたり	大野第36地割	近世	駿駁関連	鉄器	
79	IP87-2366	渋山(前高塚)	さわやまだて	大野第49地割	中世	城廻路	複路、单路	昭和59年度調査
80	IP88-2284	牛舎(林間)	うしろぼしばやしだ	大野第55地割	中世	城廻路	複路、单路	昭和59年度調査
81	IP96-0272	たてひら塚	たてひらやかた	大野第13地割	中世	城廻路	复路、单路、平場	昭和59年度調査
82	IP96-0387	長根	ながね	大野第72地割	縄文	散布地	绳文土器(後・後期)、 石器	
83	IP96-1280	敷内高塚	えのうちだて	大野第10地割	中世	城廻路	复路、单路、平场	昭和59年度調査
84	IP96-2238	植屋御丘	えこしごわい	大野第4地割	縄文	散布地	石器、单路	
85	IP96-2249	植屋沢Ⅰ	えこしごわい	大野第5地割	縄文	散布地	单路、石器	

第1表 町内の遺跡一覧(2)

No.	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺構・遺物	備考
66	JP96-2316	大野原	おおのひら	大野原5地割	中世	城郭跡	平場	昭和59年度調査
67	JP97-0012	ひともっこ原	ひともっこだて	大野原69地割	中世	城郭跡	単郭、礎跡、平場、壁穴	昭和59年度調査
68	JP97-0055	糸ヶ沢	いとがさわ	大野原59地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)	
69	JP96-1299	阿子本郷	あこひだて	阿子本郷4地割	中世	城郭跡	単郭、礎跡、壁穴	昭和59年度調査
70	JP07-0058	高森Ⅱ	たかもりⅡ	大野原57地割	縄文	散布地	縄文土器	
71	JP07-2061	上水沢Ⅰ	かみみずざわⅠ	水沢第5地割	縄文	散布地	縄文土器	
72	JP07-2288	上水沢Ⅲ	かみみずざわⅢ	水沢第7地割	縄文、弥生	集落跡	縄文土器(早~後期)、 弥生土器、土製品、石器、 アスファルト層、鉄製品、 鍛造、陶磁器(古~現代)	昭和59年度調査、 平成12年度本塗断調査、 調査記録
73	JP07-2296	上水沢Ⅴ	かみみずざわⅤ	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
74	JP07-2294	上水沢Ⅵ	かみみずざわⅥ	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
75	JP07-2275	上水沢Ⅶ	かみみずざわⅦ	水沢第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
76	JP07-2275	上水沢Ⅷ(鶴鳴原)	かみみずざわⅧ	水沢第7地割	中世	城郭跡	単郭	昭和59年度調査
77	JP08-2288	下水沢Ⅰ	しもみずざわⅠ	水沢第8地割	縄文	散布地	洞穴	
78	JP07-2293	上水沢Ⅸ	かみみずざわⅨ	水沢第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
79	JP08-0067	里内	りうち	大野原57地割	縄文	散布地	縄文土器	
100	JP08-0129	下舟島Ⅰ	いりふねⅠ	大野原57地割	古代	散布地	土師器	
101	JP08-0196	下舟島Ⅱ	いりふねⅡ	帶島第11地割	縄文	散布地	縄文土器	
102	JP08-0224	下舟島Ⅲ	いりふねⅢ	阿子本郷9地割	縄文	散布地	縄文土器	
103	JP08-0224	阿子木	あこぎ	阿子本郷12地割	縄文	散布地	縄文土器	
104	JP08-1198	下舟島Ⅳ	いりふねⅣ	帶島第11地割	縄文	散布地	縄文土器	
105	JP08-1156	鶴嘴原Ⅰ	えぞのくち	帶島第5地割	中世	城郭跡	平場、礎跡	昭和59年度調査
106	JP08-1199	上舟島Ⅰ	かみふねⅠ	帶島第8地割	縄文	散布地	縄文土器	
107	JP08-1225	二ツ屋	ふたつや	阿子本郷18地割	縄文	散布地	縄文土器	
108	JP08-1254	下舟島Ⅴ	いりふねⅤ	阿子本郷18地割	古代	散布地	土師器	
109	JP08-1272	下舟島Ⅵ	いりふねⅥ	帶島第9地割	縄文	散布地	縄文土器	
110	JP08-1376	二ツ屋原	ふたつややね	阿子本郷12地割	縄文	散布地	縄文土器	
111	JP08-1396	長坂森Ⅰ	ながさかもりⅠ	阿子本郷12地割	縄文	散布地	縄文土器	
112	JP08-2090	高森Ⅱ	たかもりⅡ	帶島第4地割	縄文	散布地	縄文土器	
113	JP08-2075	大渡Ⅱ	おおとわⅡ	帶島第1地割	縄文	散布地	縄文土器	
114	JP08-2861	大渡Ⅳ(鰐内)	おおとわたにⅣ	帶島第1地割	中世	城郭跡か?	単郭、礎跡	昭和59年度調査
115	JP08-2111	鶴嘴原	えぞのくち	帶島第4地割	中世	城郭跡	単郭、礎跡	昭和59年度調査
116	JP08-2117	鶴内Ⅰ	せきのうち	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
117	JP08-2127	鶴内Ⅱ	せきのうち	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
118	JP08-2141	上舟島Ⅲ	いりふねⅢ	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
119	JP08-2194	上舟島Ⅳ	いりふねⅣ	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
120	JP08-2211	上舟島原	いりふね原	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
121	JP08-2280	俄宋Ⅰ	いつうそ	俄宋	縄文	散布地	縄文土器	
122	JP08-2287	俄宋Ⅱ	いつうそかさん	俄宋	縄文	散布地	縄文土器	
123	JP08-2298	俄宋Ⅲ	いつうそかよん	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
124	JP08-2301	俄宋Ⅳ	いつうそかご	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
125	JP08-2301	俄宋Ⅴ	いつうそかろく	帶島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
126	JP08-2318	長坂森Ⅱ	ながさかもりⅡ	阿子本郷12地割	縄文	散布地	縄文土器(後期), 石	
127	JP08-2322	俄宋原	いつうそかなな	俄宋	縄文	散布地	縄文土器	
128	JP08-2330	俄宋原	いつうそかはち	俄宋	縄文	散布地	縄文土器	
129	JP08-2357	俄宋原	いつうそかきく	俄宋	縄文	散布地	縄文土器	
130	JP08-2375	俄宋Ⅹ	いつうそかじゅう	俄宋	縄文	散布地	縄文土器	
131	JP08-2573	俄宋原	いつうそかじゅういち	俄宋	縄文	散布地	縄文土器	
132	JP08-2280	俄宋原	いつうそかじゅうに	带島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
133	JP09-3022	長坂森Ⅲ	ながさかもりⅢ	阿子本郷12地割	縄文	散布地	石器	
134	JP09-1051	長坂森Ⅳ	ながさかもりⅣ	阿子本郷12地割	縄文	散布地	縄文土器	
135	JP09-2057	俄宋Ⅱ	いつうそかに	带島第7地割	縄文	散布地	縄文土器	
136	JP17-0140	下水沢原	しもみずざわわな	水沢第3地割	縄文	散布地	縄文土器(後期)	
137	JP17-0218	下水沢Ⅰ	しもみずざわⅠ	水沢第4地割	縄文	散布地	縄文土器	
138	JP17-0266	御園部Ⅰ	かなまほに	水沢第12地割	近世	耕作面遺	籠の口日、津波	
139	JP17-0297	御園部Ⅱ	かなまほに	水沢第12地割	縄文、古代	散布地	縄文土器、土師器、 瓦水道	

第1表 町内の遺跡一覧 (3)

第1表 町内の遺跡一覧 (4)

No.	遺跡コード	遺跡名	ふりがな	所在地	時代	種別	出土遺構・遺物	備考
186	IP48-1040	西平内Ⅲ	にしらひないに	椎山第37地割	縄文	散布地	縄文土器(前期), 石器 石斧, 破片	別記❷, 平成23年度新規発見
187	IP48-1115	東平内Ⅰ	ひがしらひないち	椎山第34地割	縄文	散布地	縄文土器, 石斧, 磨石, 破片, 破片	別記❷, 平成23年度新規発見
188	IP48-1039	東平内Ⅲ	ひがしらひないち	椎山第34地割	縄文	散布地	縄文土器(後期), 石器, 石斧, 破片	別記❷, 平成23年度新規発見
189	IP48-1080	東平内Ⅲ	ひがしらひなさん	椎山第34地割	不明	製陶場遺	口沿, 瓦津	別記❷, 平成23年度新規発見
190	IP47-1390	狹沢Ⅰ	うばさわいち	椎山第47地割	縄文	散布地	縄文土器(後期), 石器, 石斧, 破片	別記❷, 平成23年度新規発見
191	IP47-1284	狹沢Ⅱ	うばさわに	椎山第47地割	縄文, 古代	散布地	縄文土器, 石斧, 土器 石斧	別記❷, 平成23年度新規発見
192	IP47-1360	狹沢Ⅲ	うばさわさん	椎山第47地割	縄文	散布地	縄文土器(後期), 破片 石器, 破片, 古瓦	別記❷, 平成23年度新規発見
193	IP47-1362	狹沢Ⅳ	うばさわよん	椎山第47地割	縄文	散布地	縄文土器(後期), 破片 石器, 破片	別記❷, 平成23年度新規発見
194	IP48-1197	御川尻	みみなかわしり	椎山第28地割	縄文	墓葬群、 骨張跡	堅穴式竖井, 土坑, 堅穴式竖井, 破土, 墓壙, 縄文土器, 石器	別記❸❹, ❻-17, 平成25年度新規発見, 平成25年度, 28年度本発掘調査
195	IP48-2228	サンニヤⅠ	さんにやいち	椎山第25地割	縄文	墓葬群、 骨張跡、 石器	堅穴式竖井, 破土, 坚穴式竖井, 土坑, 墓壙, 破土, 破片 石器	別記❸❹, ❻-13, ❻-17, 平成25年度新規発見, 平成25年度, 28年度本発掘調査
196	IP58-0288	北鹿棲	きたかみか	椎山第18地割	縄文	墓葬群、 骨張跡	堅穴式竖井, 破土, 坚穴式竖井, 土坑, 墓壙, 破土, 破片 石器	別記❻-12, 平成25年度新規発見, 平成25年度, 28年度本発掘調査
197	IP58-1354	南難波Ⅲ	かぬかはまに	椎山第15地割	縄文	散布地	縄文土器(後期), 石器	平成25年度新規発見
198	IP58-1369	南難波Ⅰ	かぬかはまいち	椎山第15地割	縄文	散布地	縄文土器, 石器	別記❻-10, 平成25年度新規発見
199	IP59-1299	宮川	しゅくわー	椎山第5地割	縄文	散布地	縄文土器, 石器	平成25年度新規発見
200	IP69-2273	小田ノ沢	こだのざわ	椎山第3地割	縄文	散布地	石器	平成25年度新規発見
201	IP79-1217	南八木	みなみやぎ	椎山第1地割	平安	製陶場	口沿, 瓦津	平成25年度新規発見
202	IP89-1304	下向	しもむかい	中野第1地割	縄文, 佐佐	骨張跡	堅穴式竖井, 土坑, 坚穴式竖井, 破土, 破片 石器	別記❷, 8, 平成25年度新規発見, 平成26年度新規調査
203	IP89-2323	小野城内	なのじょうない	中野第1地割	縄文	骨張跡	堅穴式竖井, 土坑, 坚穴式竖井, 破土, 破片 石器	別記❷, 14, 平成25年度新規発見, 平成26年度新規調査
204	IP89-1322	黒坂	くろさか	有家第9地割	縄文	集落跡	堅穴式竖井	別記❷, 15, 平成26年度新規発見, 平成26年度新規調査
205	IP48-2231	サンニヤⅡ	さんにやに	椎山第25地割	縄文, 古代	集落跡	堅穴式竖井, 土坑, 坚穴式竖井, 土器, 破片, 石器	別記❷-15, -16, 平成26年度新規発見, 平成26年度新規調査
206	IP58-1333	南黒棲Ⅰ	みなみかみかくらち	椎山第16・17地割	縄文	集落跡	堅穴式竖井, 破土, 坚穴式竖井, 土器, 破片	別記❷, 15, 平成26年度新規発見, 平成26年度新規調査
207	IP57-0174	細野	たでの	椎山第53地割	古代	散布地, 製陶場遺	堅穴式竖井(古代), 瓦津	平成27年度新規発見。製陶場遺は 時代不明
208	IP59-2021	北玉川	きたたまがわ	椎山第14地割	縄文	散布地	縄文土器	平成27年度新規発見
209	IP57-2543	辻ノ福Ⅱ	たのはたに	椎山第44地割	縄文	骨張跡、 散布地	堅穴式竖井, 破土, 破片 堅穴式竖井	別記❷, 25-26, 平成26年度新規発見
210	IP58-0245	尾津内	おらつい	椎山第20地割	縄文	骨張跡、 散布地	堅穴式竖井, 土坑, 破土, 破片 石器	平成28年度新規発見
211	IP67-2355	柳ヶ沢Ⅰ	まつがざわいち	椎山第73地割	縄文	散布地	土器, 石器	平成28年度新規発見
212	IP58-2312	南黒棲Ⅱ	かぬかはまさん	椎山第15地割	縄文	散布地	堅穴式竖井	平成28年度新規発見
213	IP79-0012	続石	つづくいし	椎山第4地割	縄文, 古代	集落跡、 骨張跡、 散布地	縄文土器(後期), 破片 土器, 破片, 破片, 破片 石器	別記❷, 12, 平成29年度新規発見
214	IP86-2295	新田	しんでん	大野第14地割	近世	製陶場	瓦津	平成29年度新規発見
215	IP85-2335	一本松原Ⅰ	いっぽんまつむかいいち	大野第15地割	縄文, 古代, 近世	散布地, 製陶場遺	縄文土器, 土器, 破片, 瓦津 土器, 破片, 破片	平成29年度新規発見。製陶場遺は 時代不明
216	IP86-2053	一本松原Ⅱ	いっぽんまつむかいいち	大野第15地割	縄文, 近世	散布地, 製陶場遺	縄文土器, 瓦津	平成29年度新規発見。製陶場遺は 時代不明
217	IP58-1170	梅損	いたばし	椎山第21地割	縄文	骨張跡	堅穴式竖井	平成29年度新規発見
218	IP48-2250	サンニヤⅢ	さんにやさん	椎山第25地割	縄文	骨張跡	堅穴式竖井, 破片	別記❷-17, 平成29年度本発掘調査
219	IP67-2265	柳ヶ沢Ⅱ	まつがざわに	椎山第74地割	不明	製陶場遺	瓦津	平成29年度新規発見
220	IP99-0251	下向Ⅱ	しもむかいに	椎山第4地割	縄文	散布地	堅穴式竖井	平成30年度新規発見

第1表 町内の遺跡一覧 (5)

（備考欄の文献について、それぞれ次のように略した）

- 「別記※1」 岩手県種市町教育委員会 2004 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 種市町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 「別記※2」 岩手県種市町教育委員会 2005 「種市町内遺跡詳細分布調査報告書Ⅰ」 種市町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 「別記※3」 岩手県洋野町教育委員会 2013 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集
- 「別記※4」 岩手県洋野町教育委員会 2015 「平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第2集
- 「別記※5」 岩手県洋野町教育委員会 2017 「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」 洋野町埋蔵文化財調査報告書第3集
- 「別記※6」 （財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 1996・2001 「ゴッソー遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第238集・第357集
- 「別記※7」 岩手県久慈地方整備局久慈農村整備事務所・（財）岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター 2002 「上水沢Ⅱ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第391集
- 「別記※8」 （公財）岩手県文化振興事業団 2015 「平成26年度発掘調査報告書 南川尻遺跡 下向遺跡 沼袋Ⅱ遺跡 沼袋Ⅲ遺跡 八幡沖遺跡 ほか調査概報（39遺跡）」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第647集
- 「別記※9」 （公財）岩手県文化振興事業団 2016 「平成27年度発掘調査報告書 サンニヤ遺跡 房の沢Ⅳ遺跡 白石遺跡ほか調査概報（33遺跡）」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第661集
- 「別記※10」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・（公財）岩手県文化振興事業団 2017 「西平内Ⅰ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第673集
- 「別記※11」 （公財）岩手県文化振興事業団 2017 「平成28年度発掘調査報告書 岩洞湖Ⅰ遺跡・柳洞Ⅳ遺跡・八森遺跡ほか調査概報（28遺跡）」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第676集
- 「別記※12」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・（公財）岩手県文化振興事業団 2018 「北鹿郷遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第686集
- 「別記※13」 国土交通省東北地方整備局三陸国道事務所・（公財）岩手県文化振興事業団 2018 「サンニヤⅠ遺跡発掘調査報告書」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第687集
- 「別記※14」 （公財）岩手県文化振興事業団 2018 「平成29年度発掘調査報告書 岩洞湖Ⅰ・日遺跡 和野新里神社遺跡・北野畠遺跡木戸塙遺跡 中野城内遺跡 沼里遺跡 楪井沢田Ⅳ遺跡 耳取Ⅰ遺跡 千厩城遺跡 ほか調査概報（23遺跡）」 岩手県文化振興事業団埋蔵文化財調査報告書第692集
- 「別記※15」 岩手県教育委員会 平成28年3月 「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成26年度 復興関係）」 岩手県文化財調査報告書 第146集
- 「別記※16」 岩手県教育委員会 平成29年3月 「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成27年度 復興関係）」 岩手県文化財調査報告書 第149集
- 「別記※17」 岩手県教育委員会 平成30年3月 「岩手県内遺跡発掘調査報告書（平成28年度 復興関係）」 岩手県文化財調査報告書 第152集

IV. 遺跡の土層序

1. 位置と地形・地質の概要

洋野町は海岸付近を除けば山間部ないし山岳地帯を中心とする地形を呈し、西に控える階上岳（標高 739.6 m）と久慈平岳（標高 706.3 m）とその支脈の山地を起点に、太平洋に向かって延びる丘陵と段丘群で構成される。これらの丘陵と段丘群は西の山地を水源とする幾筋もの小河川によって開析され、帶状の台地が南北に並ぶ一定の地形配列が形成されている。主な小河川には北から渋谷川・川尻川・和庭川・大浜川・原子内川・有家川・高家川などがあり、いずれも東流して太平洋へと注いでいる。

段丘群は海岸・谷底平野から続き、低い方から大谷段丘－種市段丘－白前段丘－九戸段丘に区分され、そのうち種市段丘は低い方から平内面－横手面に、白前段丘は雪畠面－伝吉面に、九戸段丘は姥沢面－麦沢面－高取面にそれぞれ細分されている。段丘の基盤地質はほぼ花崗閃緑岩で占められ、この上に第四紀の砂礫層・砂層・泥層といった段丘堆積物が堆積し、さらに風化火山碎屑物で構成される褐色火山灰層群、腐植土（いわゆる黒ボク土）の土層序で現地表面に至る（松山 2013・2019）。

2. 層序

続石遺跡は九戸段丘上に立地し、遺跡内は標高 120 ~ 170 m 前後を測る丘陵地帯となっている。九戸段丘は八戸火山灰層の載る段丘で、上位に高館火山灰層、八戸火山灰層が堆積し、褐色火山灰層群を形成している。遺跡内の地形は複雑で、東側から入江状の谷地が幾筋もあり込み、舌状の尾根が南北に連続して張り出している。谷地内は埋没し、東向きに広がる平坦面が形成されている。今回の調査区はこの尾根の先端付近に位置し、遺跡範囲の東端部に相当する。

今回の調査では、土層序観察のため掘削した深掘部分（いわゆるテストピット）で高館火山灰層上面までを確認した。深掘部分は尾根の斜面下位に相当する G8 - b - 21 グリッド（A 地点）と、頂部付近に相当する H7 - e - 3 グリッド（B 地点）の 2箇所に設定した。両地点の標高差は、現況の地表面で約 4 m を測る。A 地点は立地上裡段谷の縁辺部に相当することから、このため確認された層序が B 地点とは一部異なる。土層番号は両地点を対比して極力統一したが、層数の開きがあるため、一部の層を細分することで対応した。以下、今回観察した層序の結果について記す。

第Ⅰ層：現表土で、第Ⅱ層が風化や草木根の擾乱などにより軟化した層である。また、落葉等の植物片が混じる腐食層であり、A 地点では植物片の有無で第Ⅰa・Ⅰb 層に細分した。

第Ⅱ層：黒色化が強い層で、褐色火山灰層群の上位に形成された黒ボク土である。A 地点では下層に第Ⅲ層の黄色軽石が多量に混じることから、第Ⅱa・Ⅱb 層に細分した。

第Ⅲ層：褐色火山灰層群上層に相当し、自然科学分析の結果、十和田中振火山灰（約 6,100 年前降下）に相当する可能性が指摘されている。両地点ともに第Ⅲa・Ⅲb 層に細別され、A 地点の第Ⅲa 層は黄色軽石が純層に近い状態を保つ。B 地点では上層が自然攪乱を受けるが、下層は火山灰との互層状の堆積が認められる。

第Ⅳ層：A 地点のみで認められた。第Ⅴ層が風雨などの作用により谷側へ崩落した層とみられ、埋没土的な堆積状況を呈している。色調から第Ⅳa・Ⅳb 層に細分される。

第Ⅴ層：密な縮まりをもつ、風化火山灰層である。自然科学分析の結果、十和田八戸火山灰（約 15,500 年前降下）に相当する可能性が指摘されている。

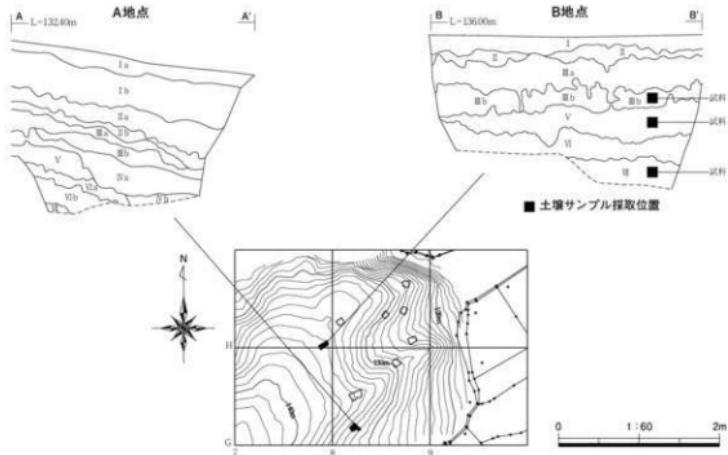
第Ⅵ層：風化火山灰層で、第Ⅴ層に一括される可能性もある。今回の調査では、微妙な層相の違いから別の層

として分離した。縦まりは A 地点では極めて密だが B 地点では極めて疎で、土質が顕著に異なる。A 地点では微妙な色調や層相の違いから、第Vla・Vlb 層に細分される。

第VI層：風化火山灰層で、自然科学分析の結果、十和田大不動火山灰（約 36,000 年前降下）に相当する可能性が指摘されている。

<引用・参考文献>

- 西澤正晴 2019 「II. 道路の立地・環境」『荒津内道路発掘調査報告書』(公財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財報告書 701 集
 松山 力 2013 「IV. 平内Ⅱ道路の地学的環境」『平内Ⅱ道路発掘調査報告書』洋野町教育委員会埋蔵文化財報告書第 1 集
 松山 力 2019 「III. 道路の地形と地質」『西平内Ⅰ道路ハンドボーリング調査報告書』洋野町教育委員会埋蔵文化財報告書第 4 集



基本土層序 A

- I a 10YR3/2 黒褐色土、粘性弱 縦まり極めて疎、草木根入る
- I b 10YR1/7 1 黒色土、粘性中 縦まり極密、25Y7/8 黄褐色石 2% 草木根入る
- II a 10YR2/1 黑褐色土、粘性中 縦まり極密、25Y7/8 黄褐色石 5% 草木根入る
- II b 10YR2/1 黑褐色土、粘性中 縦まり極密、25Y7/8 黄褐色石 30% 草木根入
- III a 25Y6/6 明黄褐色土、粘性強 縦まり極密、難分解 等分体がやや酸化
- III b 25Y8/1 2 黄褐色土、粘性中 縦まり極密、25Y7/8 黄褐色石 40% 草木根入
- IV a 25Y8/1 2 黄褐色土、粘性中 縦まり極密、25Y7/8 黄褐色石 40% 草木根入
- IV b 10YR4/2 黄褐色土、粘性中 縦まり極密、25Y7/8 黄褐色石 5% 草木根入
- V 10YR4/3 に、3 黃褐色土、粘性中 縦まり極密、25Y7/8 黄褐色石 5% 草木根入
- VI a 25Y4/3 モリブデン鉛鉱土、粘性強 縦まり極めて疎、25Y6/6 明黄褐色土大粒～極大粒 30%・25Y7/8 黄褐色石 3% 草木根入
- VI b 10YR4/4 モリブデン鉛鉱土、粘性強 縦まり極めて疎、25Y4/3 オリーブ褐色土大粒～極大粒 40%・25Y7/8 黄褐色石 2% 草木根入
- VI c 25Y5/6 黄褐色土、粘性中 縦まり極密 25Y4/4 オリーブ褐色土大粒～極大粒 25% 草木根入

基本土層序 B

- I 1 25Y3/1 黑褐色土、粘性中 縦まり極めて疎、腐食層
- II 10YR3/1 黑褐色土、粘性中 縦まり極密、10YR3/3 明黄褐色土大粒～極大粒 5% 草木根入
- III a 25Y4/2 黄褐色土、粘性中 縦まり極密、25Y6/6 明黄褐色土大粒～極大粒 30%・25Y7/8 黄褐色石 10% 草木根入
- III b 25Y6/6 明黄褐色土、粘性中 縦まり極めて疎、25Y7/8 黄褐色石 21% 粒径に 20%・草木根入る
- IV 25Y8/6 に、5 黄褐色土、粘性強 縦まり極めて疎、25Y7/8 黄褐色石 15%・25Y7/8 黄褐色石 2% 草木根入
- V 10YR6/6 明黄褐色土、粘性強 縦まり極めて疎、25Y6/6 明黄褐色土大粒～極大粒 50% 草木根入
- VI 10YR6/4 に、5 黄褐色土、粘性強 縦まり極めて疎

第 4 図 深掘土層序

V. 続石遺跡の自然科学分析

パリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

岩手県洋野町に所在する続石遺跡は、三陸海岸北部に分布する海成段丘上に位置する。現地発掘調査では、縄文時代後期の遺構や土器などの遺物が検出されている。発掘調査に伴い作成された土層断面では、黒色の火山灰土層いわゆる黒ボク土層やその下位の褐色を呈する火山灰土層いわゆるローム層が確認され、それらの土層中には軽石とされる堆積物が複数認められている。

本報告では、縄文時代の焼土遺構と考えられている遺構内の土壤を対象として、植物珪酸体分析、種実遺体分析、薄片作製鑑定を行うことにより、燃焼材および焼成の温度について検証を行う。さらに、火山灰土層中のテフラを検出し、その特性を確認することにより、指標テフラとの対比を行い、調査区内の層序対比のための指標を得る。以下にその結果を報告する。

1. 焼土遺構の分析

(1) 試料

試料は、遺構 SX1 より採取された焼土サンプル 1 点である。

(2) 分析

①植物珪酸体分析

植物体の葉や茎に存在する植物珪酸体は、珪化細胞列などの組織構造を呈している。植物体が土壤中に取り込まれた後は、ほとんどが土壤化や搅乱などの影響によって分離し単体となる。しかし、植物が燃えた後の灰には組織構造が珪化組織片などの形で残されている場合が多い（例えば、パリノ・サーヴェイ株式会社, 1993）。そのため、珪化組織片の産状により燃料材の種類が明らかになると考えられる。

焼土試料を観察したところ、明瞭な植物の灰は認められない。そのため、以下の方法により珪化組織片の濃集・分離を試みる。

湿重 5g 程度を秤量し、過酸化水素水・塩酸処理、沈定法、重液分離法（ポリタンクスチレン酸ナトリウム、比重 2.5）の順に物理・化学処理を行う。検鏡しやすい濃度に希釈し、カバーガラス上に滴下・乾燥させる。乾燥後、ブリュウラックスで封入してプレパラートを作製する。

400 倍の光学顕微鏡下で全面を走査し、その間に出現するイネ科葉部（葉身と葉鞘）の葉部短細胞に由来した植物珪酸体（以下、短細胞珪酸体と呼ぶ）や葉身機動細胞に由来した植物珪酸体（以下、機動細胞珪酸体と呼ぶ）、これらを含む珪化組織片の有無を確認し、近藤（2010）の分類を参考に同定し、計数する。

結果は、検出された種類（分類群）とその個数の一覧を第 2 表で示す。

②種実遺体分析

土壤試料から炭化種実を分離・抽出するために、試料を水に浸し、粒径 0.5mm の篩を通して水洗する。

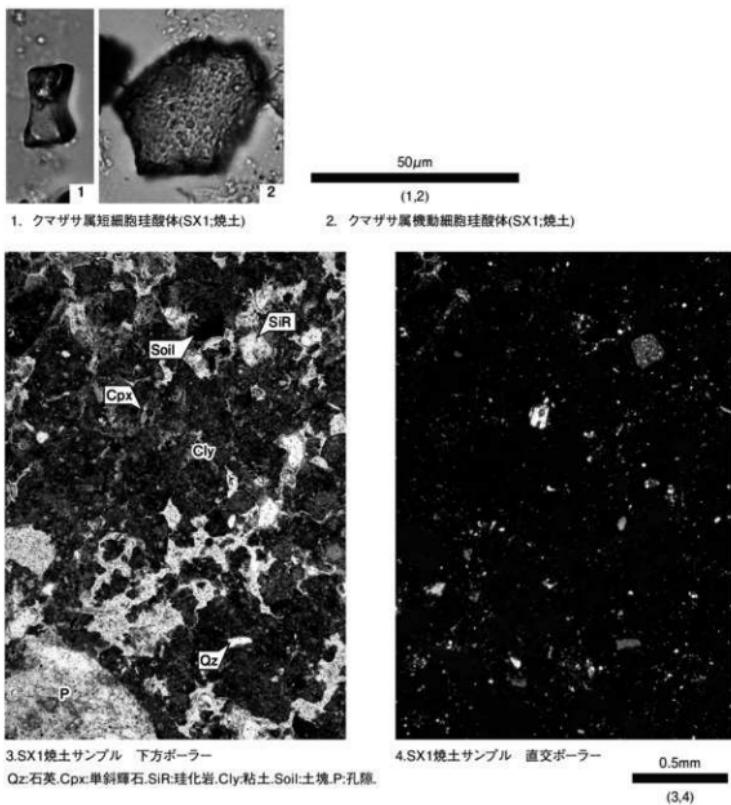
水洗後の試料を粒径の大きな試料から順に双眼実体顕微鏡下で観察し、ピンセットを用いて、同定が可能な炭化種実を抽出する他、炭化材についても精査する。分析残渣（砂礫・植物片等）は、容器に入れて保管する。

③薄片作製鑑定

薄片の顕微鏡鑑定は、試料を 0.03mm の厚さに薄く研磨し、顕微鏡下で観察すると、構成鉱物の大部分は透光性となり、鉱物の性質・組織などが観察できるようになるということを利用している。

試料を樹脂で固化したのちに、ダイヤモンドカッターにより 22 × 30 × 15mm 程度の直方体に切断して薄片

用のチップとする。そのチップをプレパラートに貼り付け、#180～#800の研磨剤を用いて研磨機上で厚さ0.1mm以下まで研磨する。さらに、メノウ板上で#2500の研磨剤を用いて正確に0.03mmの厚さに調整する。プレパラート上で薄くなった薄膜状の断面試料の上にカバーガラスを貼り付け、観察用の薄片とする。薄片は偏光顕微鏡を行い、下方ポーラーおよび直交ポーラーにおいて観察記載を行なう。また、代表的な箇所について写真撮影を行い、第5図に示す。



第5図 植物珪酸体・薄片顕微鏡写真

(3) 結果

①植物珪酸体分析

結果を第2表に示す。焼土試料からは、珪化組織片が検出されない。単体の植物珪酸体が見られるものの、検出個数は少なく、保存状態も悪い。クマザサ属を含むタケ亜科などがわずかに見られるに過ぎない。

②種実遺体分析

焼土遺構とされるSX1焼土サンプル（試料1）200cc（290g）を洗い出した結果、炭化種実は検出されなかった。炭化材も確認されなかつたため、当時の植物利用や植生に関する情報を得ることができなかつた。

③薄片作製鑑定

本試料には、粗粒シルト～極粗粒砂の鉱物片、岩片が中量程度含まれる。鉱物片は、斜長石、單斜輝石、斜方輝石、不透明鉱物などが認められる。岩片は、最大径1.2mmの安山岩、粘板岩、珪化岩などがありて微量含まれるほか、最大径1.15mmの無色透明の軽石が微量程度含まれる。基質は、淡褐色～褐色を呈し、粘土鉱物および非晶質物質から構成される。粘土鉱物は、淡褐色～褐色で隠微晶質である。非晶質物質は組織や構成組織が認められない。また、偽球状の土塊が微量程度認められ、薄片上に散点して分布する。

（4）考察

植物珪酸体分析の結果、SX1の焼土では、珪化組織片が検出されなかつた。今回の結果を見る限り、イネ科植物が燃料材となって焼土が形成された可能性は考えにくく。

なお、単体で検出されたクマザサ属を含むタケ亜科の植物珪酸体が周囲から混入したものであれば、少なくともSX1の周辺にクマザサ属などのタケ亜科が生育していたと考えられる。

微細物の洗い出しでは、炭化していない草本質の根などの植物片が少量確認されたが、後代の混入と判断される。分析残渣は、砂礫類や土粒を主体とし、土粒の多くが赤みを帯びた灰褐色を呈することから、焼土に由来すると考えられる。

薄片上の結果から、本試料における褐色の色調は、基質に拡散する水酸化鉄や褐色粘土に起因していると考えられる。水酸化鉄は、焼成されると、一般に270～325°C程度で脱水し、赤鉄鉱へ変化するとされ（吉木、1959）、濃赤色の色調へ変化することが知られている。本試料の薄片には濃赤色の色調を示す水酸化鉄が認められない。したがって、270°C程度以下の低温で焼成を受けた可能性がある。

また、本試料には淡褐色の部分と褐色の部分が混在しており、褐色の部分は被熱の痕跡と考えられる。ただし、水酸化鉄には赤味を増したものが確認できないことから、赤鉄鉱化に至る温度には達していなかつたと考えられる。

2. 土層序の分析

（1）試料

層序対比のための試料は、H7-e-3グリッドの断面に設定された深掘土層序B地点から採取された。

発掘調査所見によると、H7-e-3グリッドの深掘土層序B地点では、上位からI、II、IIIa、IIIb、V、VI、VIIの各層に分層されており、各層の年代観は不明とされている。試料は、IIIb層、V層、VII層より1点ずつ採取され、上位より順に試料番号1、試料番号2、試料番号3までの番号が付されている。

分析前の観察では、試料番号1は、明黄褐色を呈する砂混じりシルトであり、径10mm程度の白色軽石の散在が認められる。試料番号2は、黄褐色を呈する砂混じりシルトであり、径1mm程度の軽石の散在が認められる。試料番号3は、黄褐色を呈する砂混じりシルトであり、粗粒な碎屑物は認められない。

種類	(個)
イネ科葉部短細胞珪酸体	
クマザサ属	5
タケ亜科	10
不明(キビ型)	1
不明(ヒゲシバ型)	2
イネ科葉身機動細胞珪酸体	
クマザサ属	3
タケ亜科	8
不明	8
珪化組織片	-
合計	37

第2表 植物珪酸体分析結果

(2) 分析方法

試料約20gを蒸発皿に取り、水を加え泥水にした状態で超音波洗浄装置により粒子を分散し、上澄みを流し去る。この操作を繰り返すことにより得られた砂分を乾燥させた後、実体顕微鏡下にて観察する。観察は、テフラの本質物質であるスコリア・火山ガラス・軽石を対象とし、その特徴や含有量の多少を定性的に調べる。

火山ガラスは、その形態によりバブル型・中間型・軽石型の3タイプに分類した。各型の形態は、バブル型は薄手平板状、中間型は表面に気泡の少ない厚手平板状あるいは破碎片状などの塊状ガラスであり、軽石型は小気泡を非常に多く持った塊状および気泡の長く伸びた纖維束状のものとする。

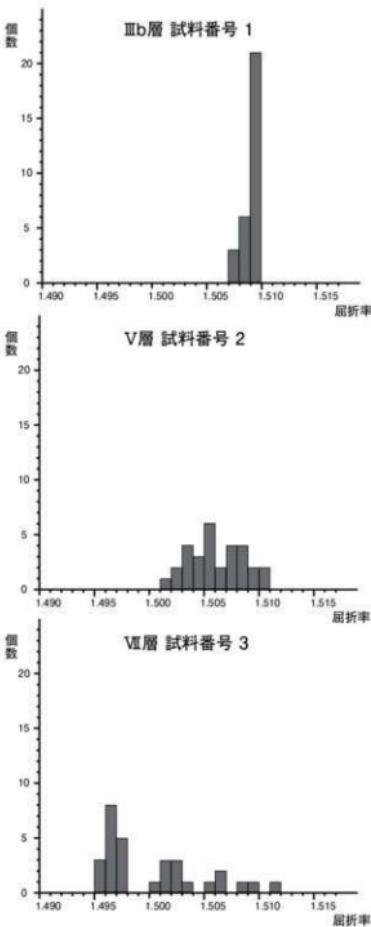
さらに軽石および火山ガラスについては、その屈折率を測定することにより、テフラを特定するための指標とする。屈折率の測定は、古澤(1995)のMAIOTを使用した温度変化法を用いた。Ⅲb層の試料番号1は軽石を、V層の試料番号2およびVII層の試料番号3は火山ガラスを屈折率測定試料とした。

(3) 結果

テフラ分析の結果を第3表に示し、軽石および火山ガラスの屈折率測定結果を第6図に示す。以下にテフラ分析結果と各試料の屈折率について述べる。

スコリアは、いずれの試料からも検出されなかった。軽石は、Ⅲb層試料番号1に少量含まれている。最大粒径が約4.0mmの軽石であり、表面は付着した土壤などで黄褐色を帯びているが、本来の色調は白色を呈し、発泡はやや良好なものが多く、次いで良好のものが多い。火山ガラスはいずれの試料にも含まれている。無色透明の軽石型を主体とし、無色透明のバブル型が微量程度混在する。

火山ガラスの屈折率を第6図に示す。火山ガラスの屈折率は、試料によって異なっている。試料番号1の軽石はn1.507～1.509の極めて狭いレンジを示し、n1.509付近に鋭いピークが認められる。試料番号2の火山ガラスは、n1.501～1.510の広いレンジを示し、n1.505付近にモードが認められる。試料番号3は、n1.495～1.511の極めて広いレンジを示し、n1.496付近にモードが認められる。



第6図 火山ガラスの屈折率

グリッド	層名	試料番号	火山ガラス		軽石		
			量	色調・形態	量	色調・発泡度	最大粒径
H7-e-3 グリッド	深掘土層序Ⅲ b 層 B 地点	1	+++	cl · pm>cl · bw	++	W · sg ~ g>G · sg	4.0
H7-e-3 グリッド	深掘土層序Ⅴ 層 B 地点	2	++	cl · pm>cl · bw	-		
H7-e-3 グリッド	深掘土層序Ⅶ 層 B 地点	3	+	cl · pm>cl · bw, br · bw	-		

凡例 ー:含まれない、(+) :きわめて微量、+:微量、++:少量、+++:中量、++++:多量。

W:白色、G:灰色。

g: 良好、sg: やや良好、最大粒径は mm。

cl: 無色透明、br: 棕色、bw: バブル型、pm: 軽石型。

第3表 テフラ分析結果

(4) 考察

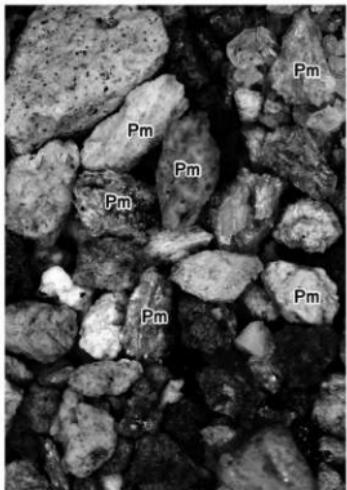
統石遺跡は、その地理的位置から十和田カルデラを給源とするテフラの降下堆積物が比較的厚く分布している範囲内にある。今回の調査で認められた土層の年代とされている繩文時代や旧石器時代は、十和田カルデラの活動ステージにおけるカルデラ形成期から後カルデラ期 (Hayakawa,1985) にも相当することから、調査区内の土層断面で認められた降下軽石層およびテフラ分析で検出された軽石や火山ガラスおよびスコリアは、いずれも十和田カルデラを給源とするテフラに由来する可能性が高い。

Ⅲ b 層は、分析前の試料の外観とテフラ分析結果から、降下軽石層と考えられ、軽石の特徴と火山ガラスの屈折率から、由来するテフラは十和田中揮テフラ (To-Cu: Hayakawa,1985) に由来すると考えられる。To-Cu の噴出年代は、暦年で 6,100 年前とされている (工藤, 2008)。

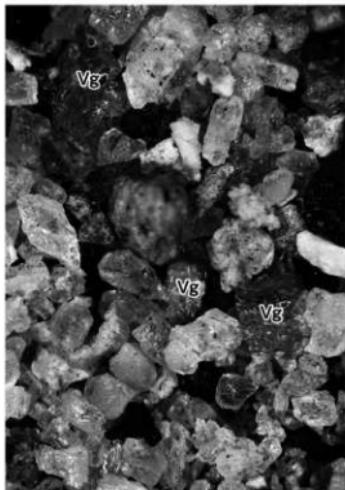
V 層は、検出された火山ガラスの屈折率から、十和田八戸テフラ (To-H: Hayakawa,1985) に由来する可能性が高い。松山・大池 (1986) によれば、八戸市付近で To-H は I 層から VII 層までのユニットが記載されており、そのうち軽石層の層相を示す層位は 3 層認められている。なお、To-H の噴出年代は、暦年で 1 万 5,500 年前とされている (工藤, 2008)。

VII 層は、検出された火山ガラスの屈折率のレンジの広さから、異なる種類のテフラが混在している可能性が考えられる。特に、屈折率が n1495 ~ 1497 までのレンジを示す火山ガラスは、その特徴的な屈折率から、洞爺テフラ (Toya: 町田ほか, 1987) に由来する可能性が指摘できる。Toya は、北海道の洞爺カルデラを給源として北日本に広く分布するテフラで、統石遺跡が所在する岩手県北部で層厚 10cm 程度を示す。その噴出年代は、11.2 ~ 11.5 万年前とされている (町田・新井, 2003)。噴出年代から推定すると再堆積物に由来する可能性がある。

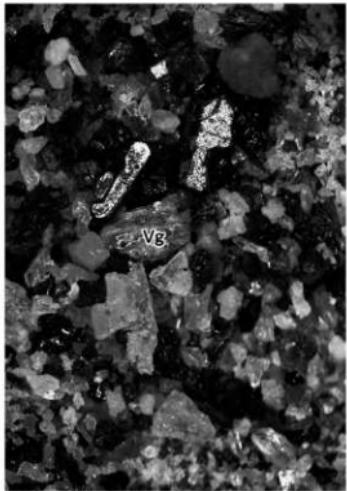
一方、屈折率が n1500 ~ 1511 までのレンジを示す火山ガラスは、上述した To-H の可能性も考えられるが、To-H よりも下位の層位から検出されたことを考慮すると、十和田大不動テフラ (To-Of: Hayakawa, 1985) に由来する可能性がある。なお、バブル型火山ガラスは、上述した To-H の軽石層中にも含まれていることから、To-H の軽石層中にも To-Of 由来の火山ガラスが混在している可能性がある。両テフラの火山ガラス屈折率のレンジは重複する範囲が広く、識別が難しいという事情もある。なお、To-Of は大規模な火砕流が噴出したテフラとして知られており、今回検出された火山ガラスは、火砕流に由来する火山灰である可能性がある。To-Of の噴出年代については、小岩ほか (2007) による放射性炭素年代で 3 万 2,000 年前後という値が示されている。その暦年代は呈示されていないが、暦年では概ね 3 万 6,000 年前頃になるとみられる。



1.IIIb層 試料番号1

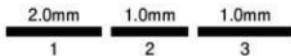


2.V層 試料番号2



3.VII層 試料番号3

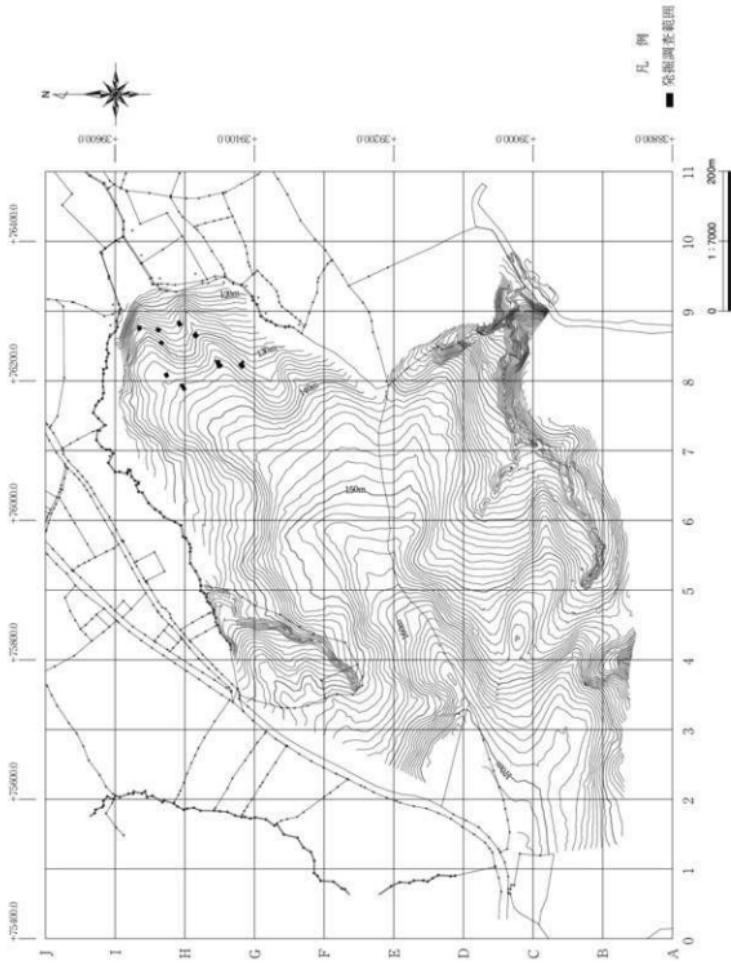
Pm:軽石,Vg:火山ガラス.



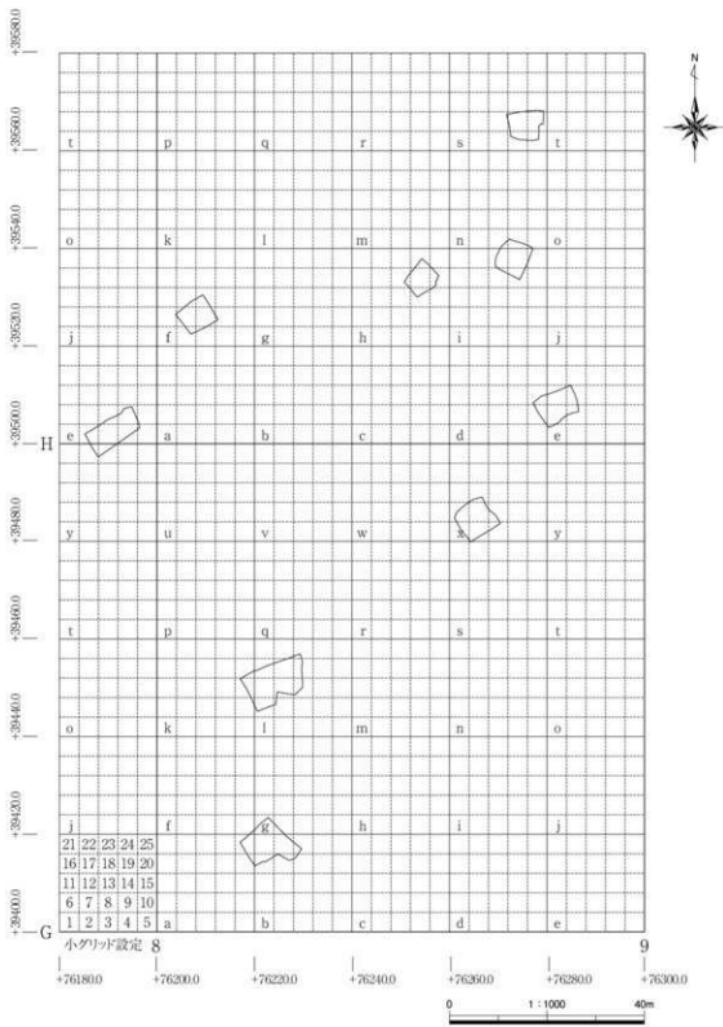
第7図 テフラ顕微鏡写真

<引用文献>

- 古澤 明.1995.火山ガラスの屈折率測定および形態分類とその統計的な解析に基づくテフラの識別.地質学雑誌,101,123-133.
- 近藤鍊三.2010.プラント・オパール図譜.北海道大学出版会,387p.
- Hayakawa,Y.,1985.Pyroclastic Geology of Towada Volcano. Bulletin of The Earthquake Reserch Institute University of Tokyo,vol.60,507-592.
- 小岩直人・柴 正敏・葛西優貴.2007.青森県屏風山砂丘地帯,館岡層中の十和田大不動テフラのAMS14C年代.第四紀研究,46,437-441.
- 工藤 崇.2008.十和田火山エピソードE及びG噴出物の放射性炭素年代.火山,53,193-199.
- 町田 洋・新井房夫.2003.新編 火山灰アトラス.東京大学出版会,336p.
- 町田 洋・新井房夫・宮内崇裕・奥村晃史.1987.北日本を広くおおう洞爺火山灰.第四紀研究,26,129-145.
- 松山 力・大池昭二.1986.十和田火山噴出物と火山活動.十和田科学博物館 No.4.1-64.十和田開発株式会社.
- バリノ・サーヴェイ株式会社.1993.自然科学分析からみた人々の生活(1).慶應義塾藤沢校地理文化財調査室編「湘南藤沢キャンパス内遺跡 第1巻 総論」.慶應義塾,347-370.
- 吉本文平.1959.鉱物工学.技報堂,710p.

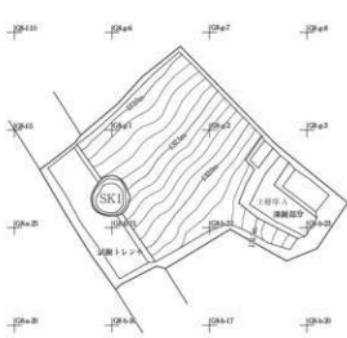


第8図 大グリッド設定図

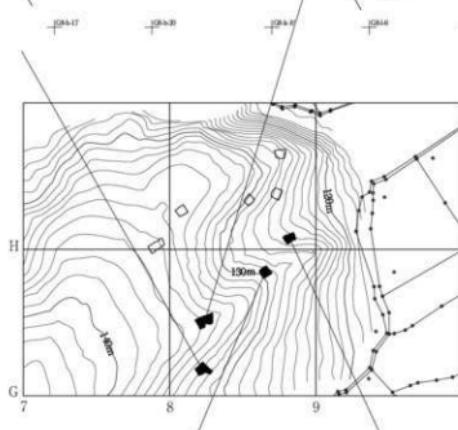
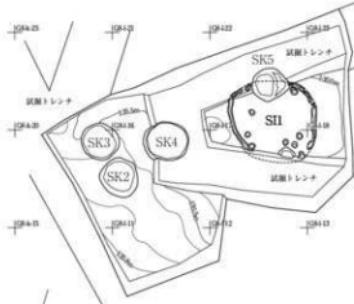


第9図 中・小グリッド設定図、調査区配置図

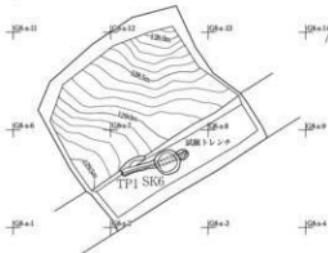
① G8-b-21グリッド



② G8-l-11・16・17グリッド



③ G8-x-2グリッド



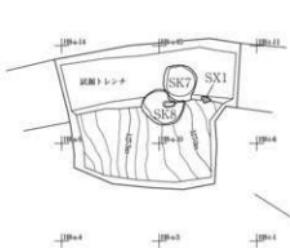
④ H8-e-6グリッド



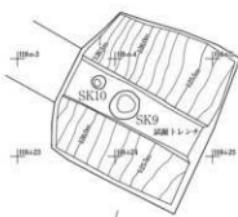
0 1:200 5m

第10図 各調査区構造配置図（1）

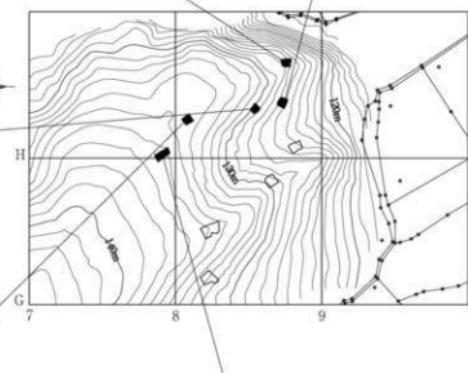
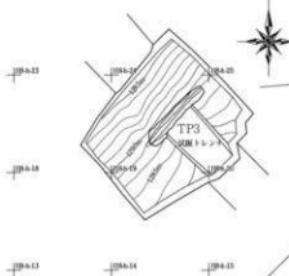
⑤ H8-s-10グリッド



⑥ H8-I-24グリッド



⑦ H8-h-19グリッド



⑧ H8-f-8グリッド



⑨ H7-e-3グリッド



0 1:200 5m

第11図 各調査区遺構配置図(2)

VI. 検出された遺構と遺物

発掘調査の結果、竪穴住居跡 1 棟、土坑 11 基、溝状土坑 4 基、性格不明遺構 1 基が検出された。これらの分布には偏りが認められないが、竪穴住居跡の周辺には土坑 4 基が近接する。

1. 竪穴住居跡

1号竪穴住居跡（第 12 図、第 4・5 表、写真図版 6～9）

G8-1-12・13 及び G8-1-17・18 グリッドに跨り、標高 135.0 m 程を測る尾根の頂部付近に位置する。上部は樹木などの繁茂から表土化が著しく、床面付近のみが検出された。南側及び北側は試掘時のトレンチ掘削により失われ、壁も西壁が残存するのみであるが、周溝が巡ることから範囲が特定された。北側には SK5 土坑が本住居跡を切って重複する。また、本住居跡の西側には土坑 SK2～4 が近接して掘り込まれている。

平面形状は円形と推定され、規模は東西 3.54 m を測り、南北 3.68 m の範囲が残存する。床面は地山を床面とし、概ね平坦に構築されている。硬化はほぼ全域に及ぶが、樹木根の侵食のため部分的に軟化する。壁は西壁が 3～11cm の高さで残存し、やや外傾して立ち上がる。堆積土は自然堆積とみられるが表土化が著しく、観察できたのは西側の一部である。2 層に分層され、黒褐色土を主体とし、壁際には暗褐色土が薄く堆積する。

付属施設は、周溝、ピット、炉跡が検出された。周溝は幅 9～21cm、深さ 4～12cm を測り、東側では部分的に断続するが、全周していたとみられる。底面は不規則に凹凸する。ピットは 8 基検出され、このうち Pit1～6・8 が柱穴とみられる。分布はやや不規則ではあるが、壁寄りを巡るように配置される傾向がある。規模は開口部の長軸で 22～36cm を測り、25cm 前後の規模が主体である。深さは 16～47cm を測る。Pit1～4 の土層断面では柱材の痕跡とみられる不自然な層位が確認され、Pit1 の底面からは円形の変色範囲が検出された。Pit7 は長軸 64cm、深さ 21cm を測り、土坑状を呈するが、性格については不明である。炉跡は床面のほぼ中央に位置する地床炉で、炉体を伴わない被熱範囲として検出された。平面形状は歪んだ方形状を呈し、規模は東西 45cm × 南北 44cm を測る。SYR5/6 明赤褐色に赤化し、硬く焼け締まる。

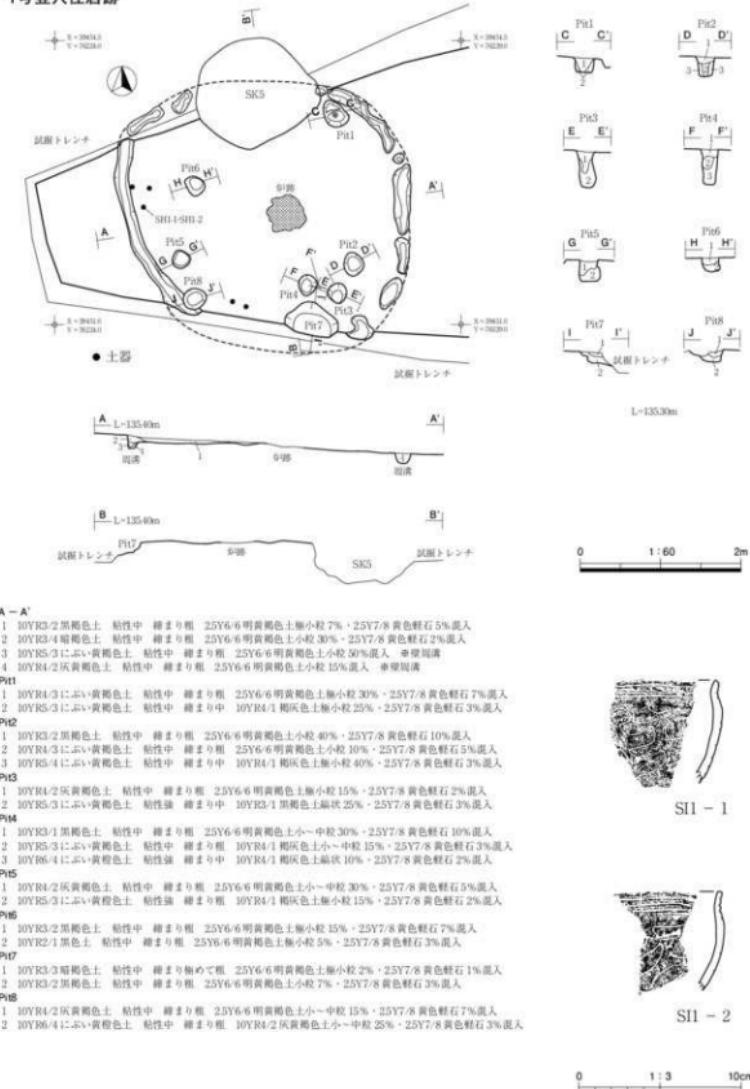
遺物は、縄文土器が 18 点出土し、そのうち 2 点を掲載対象とした。いずれも床面付近から出土し、本住居跡に共伴する遺物とみられる。SII-1・2 は鉢の口縁部付近の破片で、接合はしないが同一個体とみられる。口縁部には小波状を呈し、3 条の横位平行沈線文が施文される。胴部には意匠不明の複雑な沈線文が施文される。復元口径 7.5cm 程の小型品である。

Pit	平面形状	長×短×深(cm)	特記事項
1	楕円形	36 × 26 × 20	底面変色範囲 7 × 7cm
2	円形	29 × 25 × 25	土層断面に柱抜取痕
3	円形	25 × 23 × 47	土層断面に柱抜取痕
4	円形	26 × 23 × 45	

Pit	平面形状	長×短×深(cm)	特記事項
5	円形	23 × 23 × 24	
6	円形	22 × 16 × 16	
7	楕円形？	64 × 41 × 21	土坑状
8	円形	29 × 26 × 16	

第 4 表 1号竪穴住居跡付属ピット一覧

1号竪穴住居跡



第12図 1号竪穴住居跡・出土遺物

2. 土坑

SK1 土坑（第13図、第5表、写真図版9・12）

G8-a-25・G8-b-21グリッドの南側に跨り、標高1325m程を測る南東向き斜面の下位に位置する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径166cm×短径159cm、底部で長径120cm×短径111cm、深さは最深部で86cmを測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がり、開口部付近でさらに外反する。断面形状は逆台形に近いが、南壁の下位がややオーバーハングする。堆積土は6層に分層され、黒色土・黒褐色土を主体とし、底部付近には部分的に暗褐色土の堆積がみられる。土坑内からは縄文土器の破片が2点出土し、そのうち1点を掲載対象とした。SK1-1は深鉢の胴部破片で、3条の横位平行沈線文が施文される。

SK2 土坑（第13図、第5表、写真図版9・10・12）

G8-k-15・G8-l-11グリッドの中央に跨り、標高1355m程を測る尾根の頂部付近に位置する。北側にはSK3土坑が、北東側にはSK4土坑が近接する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径166cm×短径152cm、底部で長径126cm×短径124cm、深さは最深部で47cmを測る。底面はやや丸みをもち、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形に近い。堆積土は5層に分層され、上層は黒色土・黒褐色土、下層は暗褐色土を主体とする。土坑内からは縄文土器の破片が6点と、縫1点が出土し、そのうち縄文土器2点を掲載対象とした。SK2-1は深鉢の胴部破片で、縫位回転によるLRの縄文が施文される。SK2-2は深鉢の口縁部破片で、Rの網目状撚糸文が施文される。

SK3 土坑（第13図、第5表、写真図版10・12）

G8-k-15・20、G8-l-11・16グリッドの東側に跨り、SK2土坑の北側に近接する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径152cm×短径152cm、底部で長径135cm×短径121cm、深さは最深部で36cmを測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は4層に分層され、黒褐色土を主体とする。土坑内からは縄文土器の破片が3点出土し、そのうち1点を掲載対象とした。SK3-1は深鉢の底部破片で、外面には木葉痕を撫で消した跡が認められる。

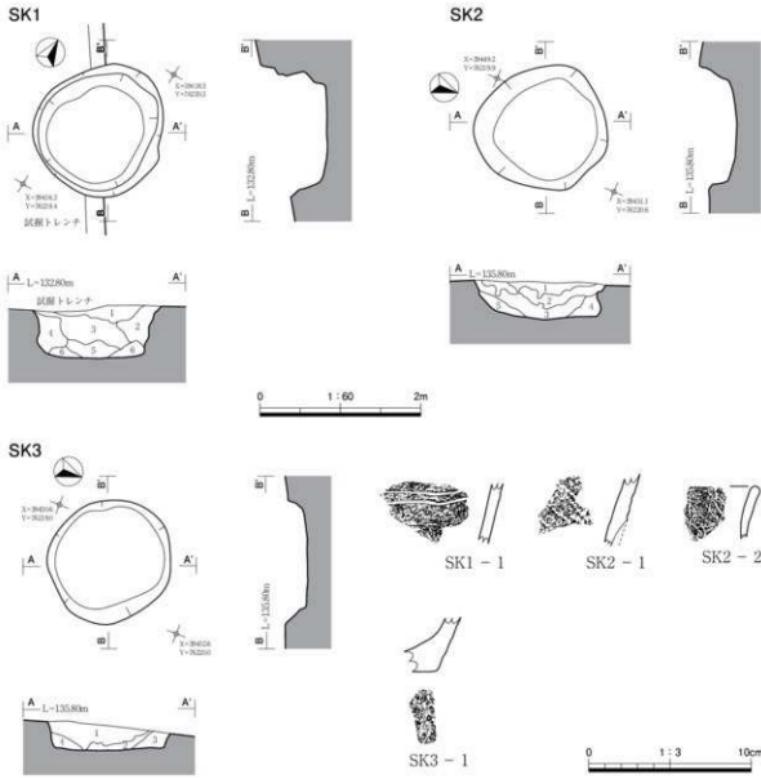
SK4 土坑（第14図、写真図版10）

G8-l-11・16グリッドの西側に跨り、SK2・3土坑の東側に近接する。平面形状は梢円形を呈し、規模は開口部で長軸183cm×短軸157cm、底部で長軸164cm×短軸147cm、深さは最深部で55cmを測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形に近いが、東壁から北壁にかけて下位がややオーバーハングする。堆積土は6層に分層され、上層は黒色土・黒褐色土、下層は暗褐色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。

SK5 土坑（第14図、第5表、写真図版11・12）

G8-l-17グリッドの中央付近に位置し、1号堅穴住居跡の北側を切って重複する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径152cm×短径136cm、底部で長径85cm×短径71cm、深さは最深部で54cmを測る。底面は丸みをもち、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状はU字形に近いが、東壁には最大で36cmの幅をもつテラス状の段差を伴う。堆積土は3層に分層され、上層は黒色土・黒褐色土、下層は褐灰色土を主体とする。土坑内からは縄文土器の破片が6点と剥片9点が出土し、そのうち縄文土器2点を掲載対象とした。SK5-1・2はともに深鉢の破片で、同一個体とみられるが、接合はしない。SK5-1は口縁部、SK5-2は胴部下位に相

当する。口縁部は波状を呈し、やや外反する。口唇波頂部には刻目文、口縁部～胴部には弧状・渦巻状の沈線文が施文される。沈線文は3条一組である。SK5-3は深鉢の胴部中位で、Rの網目状撲糸文が施文される。



SK1

- 30YR2/1 黒色土 粘性中 繊まり粗 10YR5/3 にふい黄褐色土小～大粒5%・25Y7/8 黄色軽石3%混入
- 30YR2/2 底黄褐色土 粘性中 繊まり粗 10YR6/4 にふい黃褐色土中～細大粒40%・25Y7/8 黄色軽石2%混入
- 30YR3/1 黑褐色土 粘性中 繊まり粗 10YR5/3 にふい黄褐色土小～大粒7%・25Y7/8 黄色軽石2%混入
- 40YR4/2 底黄褐色土 粘性中 繊まり粗 10YR6/3 にふい黄褐色土中～細大粒30%・25Y7/8 黄色軽石1%混入
- 30YR2/1 黒色土 粘性強 繊まり密 10YR6/4 にふい黄褐色土小～大粒5%・25Y7/8 黄色軽石1%混入
- 30YR3/3 黑褐色土 粘性強 繊まり密 10YR5/3 にふい黄褐色土小～大粒10%混入

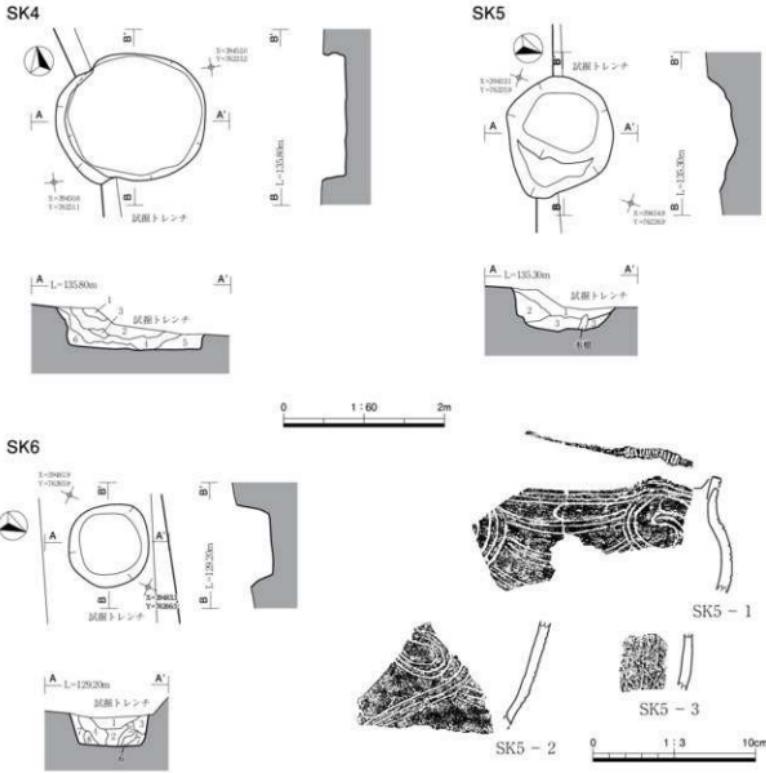
SK2

- 30YR2/1 黑褐色土 粘性中 繊まり粗 25Y6/6 明黄褐色土小～大粒3%・25Y7/8 黄色軽石3%混入
- 25Y3/1 黑褐色土 粘性中 繊まり中 25Y6/6 明黄褐色土小～大粒7%・25Y7/8 黄色軽石7%混入
- 30YR3/1 黑褐色土 粘性中 繊まり粗 25Y6/6 明黄褐色土中～細大粒25%・25Y7/8 黄色軽石5%混入
- 40YR3/2 黑褐色土 粘性中 繊まり中 25Y6/6 明黄褐色土中～細大粒40%・25Y7/8 黄色軽石2%混入
- 30YR3/3 にふい黄褐色土 粘性中 繊まり粗 10YR3/1 黑褐色土中～細大粒50%・25Y7/8 黄色軽石7%混入

SK3

- 30YR3/2 黑褐色土 粘性中 繊まり粗 25Y6/6 明黄褐色土小～大粒2%・25Y7/8 黄色軽石10%混入
- 25Y3/2 底黄褐色土 粘性中 繊まり中 25Y6/6 明黄褐色土小粒30%・25Y7/8 黄色軽石5%混入
- 30YR3/2 黑褐色土 粘性中 繊まり粗 25Y6/6 明黄褐色土中～細大粒40%・25Y7/8 黄色軽石5%混入
- 40YR4/2 底黄褐色土 粘性中 繊まり粗 25Y6/6 明黄褐色土中～細大粒50%・25Y7/8 黄色軽石5%混入

第13図 土坑SK1～SK3・出土遺物



SK4

- 2.5Y4/2 黒褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 40%・25Y7/8 黄色鮮石 10%混入
- 10Y8R2-1 黑色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 10%・25Y7/8 黄色鮮石 7%混入
- 10Y9R3-2 黑褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 20%・25Y7/8 黄色鮮石 5%混入
- 2.5Y3/2 黑褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 20%・25Y7/8 黄色鮮石 7%混入
- 2.5Y4/1 黑灰色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 30%・25Y7/8 黄色鮮石 10%混入
- 10Y8R4-2 黑褐褐色土。粘性中。練まり粗。10Y8R6-4 に於く黄褐色土中～極大粒 40%・25Y7/8 黄色鮮石 7%混入

SK5

- 10Y9R3-2 黑褐色土。粘性中。練まり粗。10Y7R8-4 に於く黄褐色土中粒 15%・25Y7/8 黄色鮮石 10%混入
- 10Y8R2-1 黑色土。粘性中。練まり粗。10Y8R6-4 に於く黄褐色土中～極大粒 40%・25Y7/8 黄色鮮石 5%混入。木棺入る
- 10Y8R4-1 黑灰色土。粘性中。練まり粗。10Y8R6-4 に於く黄褐色土中～極大粒 50%・25Y7/8 黄色鮮石 7%混入。木棺入る

SK6

- 10Y8R2-1 黑色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 5%・25Y7/8 黄色鮮石 2%混入
- 10Y8R3-1 黑褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 7%・25Y7/8 黄色鮮石 5%混入
- 2.5Y4/1 黑灰色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土中～極大粒 30%・25Y7/8 黄色鮮石 7%混入
- 2.5Y3/2 黑褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土中～極大粒 20%・25Y7/8 黄色鮮石 2%混入
- 2.5Y4/2 黑褐黄色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 5%・25Y7/8 黄色鮮石 3%混入
- 2.5Y4/3 オリーブグリーン褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土小粒 40%・25Y7/8 黄色鮮石 1%混入
- 2.5Y5/4 黄褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土中～極大粒 50%混入
- 2.5Y5/5 黄褐色土。粘性中。練まり粗。25Y6-6 明黄褐色土中～極大粒 40%混入

第 14 図 土坑 SK4 ~ SK6 ・出土遺物

SK6 土坑（第 14 図、写真図版 11）

H8 - x - 2 グリッドの北側、標高 129.0 m 程を測る北東向き斜面の中腹に位置し、TPI 溝状土坑を切って重複する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径 107cm × 短径 101cm、底部で長径 80cm × 短径 80cm、深さは最深部で 51cm を測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は 8 層に分層され、黒色土・黒褐色土・暗灰黄色土・黄灰色土・黄褐色土などが複雑に堆積する。土坑内からの出土遺物はない。

SK7 土坑（第 15 図、写真図版 11）

H8 - s - 10 グリッドの西端、標高 127.0 m 程を測る東向き斜面の中腹に位置し、SK8 土坑を切って重複する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径 151cm × 短径 135cm、底部で長径 125cm × 短径 114cm、深さは最深部で 57cm を測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形に近いが、南壁から西壁にかけて下位がオーバーハングする。堆積土は記録漏れである。土坑内からの出土遺物はない。

SK8 土坑（第 15 図、写真図版 11）

H8 - s - 9・10 グリッドの南側に跨り、SK7 土坑に切られて重複する。平面形状は梢円形を呈し、規模は開口部で長軸 178cm × 短軸 146cm、底部で長軸 165cm × 短軸 133cm、深さは最深部で 63cm を測る。底面はやや起伏し、北東方向へと傾斜する。中央には長軸 53cm × 短軸 25cm、深さ 10cm を測る梢円形の浅い掘り込みを伴う。壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形に近い。堆積土は 3 層に分層され、暗灰黄色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。

SK9 土坑（第 15 図、写真図版 11）

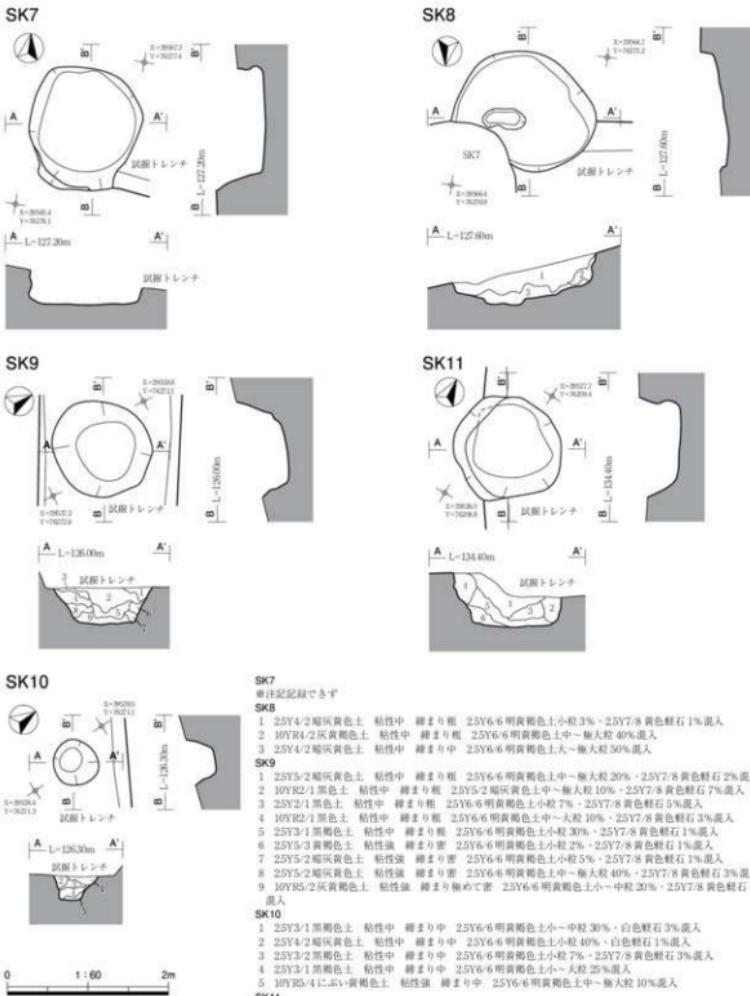
H8 - i - 23・24 グリッドの中央に跨り、標高 126.0 m 程を測る谷頭内に位置する。北西側には SK10 土坑が近接する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径 130cm × 短径 117cm、底部で長径 72cm × 短径 70cm、深さは最深部で 68cm を測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は 9 層に分層され、上層は黒色土・黒褐色土、下層は暗灰黄色土・灰黃褐色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。

SK10 土坑（第 15 図、写真図版 12）

H8 - i - 23 グリッドの北東側に位置し、南東側には SK9 土坑が近接する。ピット状の小規模な土坑である。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径 58cm × 短径 54cm、底部で長径 31cm × 短径 26cm、深さは最深部で 41cm を測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形を呈する。堆積土は 5 層に分層され、黒褐色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。

SK11 土坑（第 15 図、写真図版 12）

H8 - f - 8 グリッドの北西側、標高 134.0 m 程を測る尾根の頂部付近に位置する。平面形状は円形を呈し、規模は開口部で長径 133cm × 短径 122cm、底部で長径 98cm × 短径 90cm、深さは最深部で 71cm を測る。底面は平坦で、壁は底部から外傾して立ち上がる。断面形状は逆台形に近いが、北壁から東壁にかけて下位がオーバーハングする。堆積土は 6 層に分層され、上層は黒色土・黒褐色土、下層は黄灰色土・暗灰黄色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。



第15図 土坑SK7～SK11

3. 溝状土坑

TP1 溝状土坑（第 16 図、写真図版 13）

G8 - x - 2 グリッドの北側、標高 129.0 m 程を測る北東向き斜面の中腹に位置し、等高線に対して直交する。また、SK6 土坑に切られて重複する。平面形状は細長楕円形を呈し、長軸方向は N - 71° - E を示す。規模は開口部で長軸 282cm × 短軸 31cm を測るが、上部は試掘時のトレンチ掘削により大半が失われており、56cm 以上を有していたとみられる。底部の規模は長軸 288cm × 短軸 7cm、深さは復元すると中央で 103cm、最深部で 112cm を測る。開口部の長軸両端の比高差は 38cm を測る。底面は不規則に起伏し、地形に沿って傾斜する。長軸両側の壁はオーバーハングして立ち上がる。短軸の断面形状は V 字形を呈すが、一部残存する上壁から本来は Y 字形であったとみられる。堆積土は 6 層に分層され、上層～中層は黄灰色土・暗灰黄色土、下層は黒色土・黒褐色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。

TP2 溝状土坑（第 16 図、写真図版 13）

H8 - d - 10・H8 - e - 6・11 グリッドに跨り、標高 125.0 m 程を測る谷頭内に位置し、等高線に対して直交する。平面形状は細長楕円形を呈し、長軸方向は N - 49° - E を示す。規模は開口部で長軸 361cm × 短軸 48cm、底部で長軸 385cm × 短軸 13cm、深さは中央で 123cm を測り、ここが最深部となる。開口部の長軸両端の比高差は 41cm を測る。底面は不規則に起伏し、地形に沿って傾斜する。長軸両側の壁はオーバーハングして立ち上がる。短軸の断面形状は Y 字形を呈する。堆積土は 8 層に分層され、黒色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。

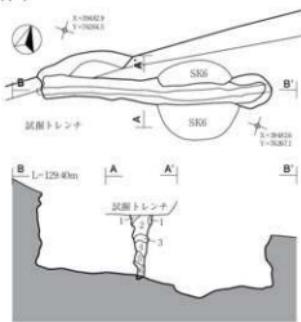
TP3 溝状土坑（第 16 図、写真図版 13）

H8 - h - 19 グリッド北東側、標高 129.0 m 程を測る南東向き斜面の中腹に位置し、等高線に対して平行する。平面形状は細長楕円形を呈し、長軸方向は N - 44° - E を示す。規模は開口部で長軸 309cm × 短軸 45cm、底部で長軸 322cm × 短軸 10cm、深さは中央で 107cm を測り、最深部で 114cm を測る。開口部の長軸両端の比高差は 13cm を測る。底面は平坦で、概ね水平である。長軸東側の壁は垂直に、西側の壁はオーバーハングして立ち上がる。短軸の断面形状は東側で V 字形、西側で Y 字形を呈する。堆積土は 9 層に分層され、黒色土・黒褐色土を主体に、中層にぶい黄褐色土が堆積する。土坑内からの出土遺物はない。

TP4 溝状土坑（第 17 図、写真図版 14）

H7 - e - 2・3 グリッド南西側、標高 135.5 m 程を測る尾根の頂部付近に位置し、等高線に対して直交する。平面形状は細長楕円形を呈し、長軸方向は N - 52° - E を示す。規模は開口部で長軸 325cm × 短軸 73cm、底部で長軸 410cm × 短軸 28cm、深さは中央で 121cm を測り、ここが最深部となる。開口部の長軸両端の比高差は 13cm を測る。底面は丸みをもつ、両壁際から中央にかけて 61cm の比高差を有する。長軸両壁はオーバーハングして立ち上がり、東壁で 38cm、西壁で 39cm と、かなり深く抉り込まれている。短軸の断面形状は逆台形を呈し、上部が開く。堆積土は 9 層に分層され、上層部は黒色土・黒褐色土、中層以下は灰黄褐色土・ぶい黄褐色土を主体とする。土坑内からの出土遺物はない。

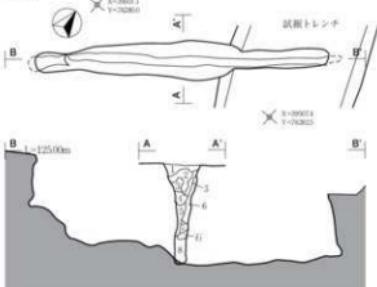
TP1



TP1

- 1 2SY5/2 塗灰黄色土 粘性中 線まり中 2SY6/6 明黃褐色土小～大粒 40%混入
- 2 2SY4/1 黒灰色土 粘性中 線まり中 2SY6/6 明黃褐色土細小～中粒 15%・2SY7/8 黄色軽石 2%混入
- 3 10YR4/1 黒褐色土 粘性中 線まり中 2SY6/6 明黃褐色土細小～中粒 10%混入
- 4 2SY4/2 塗灰黄色土 粘性中 線まり中 2SY6/6 明黃褐色土小～大粒 20%混入
- 5 10YR3/1 黑色土 粘性中 線まり中 10YR6/6 明黃褐色土小～大粒 5%混入
- 6 10YR3/1 黑褐色土 粘性中 線まり中 10YR6/6 明黃褐色土細小～中粒 7%混入

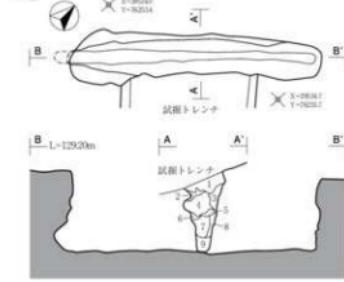
TP2



TP2

- 1 10YR2/1 黑色土 粘性中 線まり粗 2SY6/6 明黃褐色土小粒 5%・2SY7/8 黄色軽石 2%混入
- 2 10YR1/1 黒色土 粘性中 線まり粗 2SY6/6 明黃褐色土小粒 2%・2SY7/8 黄色軽石 1%混入
- 3 10YR2/1 黑色土 粘性中 線まり粗 2SY6/6 明黃褐色土小粒 7%・2SY7/8 黄色軽石 2%混入
- 4 10YR1/1 黒色土 粘性中 線まり粗 2SY6/6 明黃褐色土小粒 10%・2SY7/8 黄色軽石 3%混入
- 5 10YR2/1 黑色土 粘性中 線まり粗 2SY6/6 明黃褐色土中～大粒 7%・2SY7/8 黄色軽石 2%混入
- 6 10YR1/1 黑褐色土 粘性中 線まり粗 2SY6/6 明黃褐色土小粒 5%混入
- 7 10YR2/1 黑色土 粘性中 線まり粗 10YR6/4 にぶい黃褐色土中～極大粒 40%混入
- 8 10YR6/3 にぶい 黃褐色土 粘性強 線まり中 10YR2/1 黑色土小～大粒 10%混入

TP3

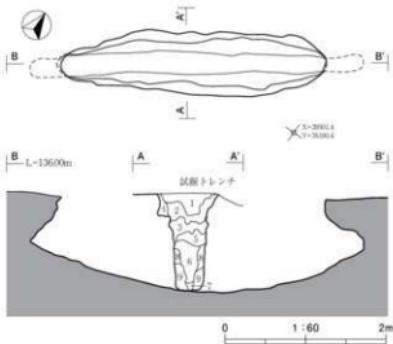


TP3

- 1 10YR2/1 黑色土 粘性中 線まり粗 2SY5/2 塗灰黄色土中～極大粒 20%・2SY7/8 黄色軽石 5%混入
- 2 2SY4/2 塗灰黄色土 粘性中 線まり中 2SY6/4 にぶい 黄色土小～極大粒 40%混入
- 3 2SY4/2 塗灰黄色土 粘性中 線まり粗 2SY5/2 塗灰黄色土中～極大粒 40%・2SY7/8 黄色軽石 10%混入
- 4 10YR1/1 黒色土 粘性中 線まり粗 2SY6/4 にぶい 黄色土小～中粒 10%・2SY7/8 黄色軽石 5%混入
- 5 10YR1/1 黑褐色土 粘性強 線まり粗 2SY6/4 にぶい 黄色土中～極大粒 50%混入
- 6 10YR3/1 黑褐色土 粘性中 線まり粗 2SY6/4 にぶい 黄色土中～極大粒 40%混入
- 7 10YR6/3 にぶい 黄褐色土 粘性強 線まり粗 2SY6/4 にぶい 黄色土小～極大粒 30%混入
- 8 10YR6/4 にぶい 黄褐色土 粘性強 線まり中 2SY6/4 にぶい 黄色土中～極大粒 50%混入
- 9 10YR3/2 黑褐色土 粘性中 線まり中 2SY6/4 にぶい 黄色土小～大粒 7%混入

0 1:60 2m

第16図 溝状土坑 TP1～TP3

TP4 X=30012
Y=30369

- TP4
- 1 10YR2/1 黒色土 粘性中 線まり粗 25Y6/4 にぶい黄色土小粒1%～25Y7/8 黄色軽石5%混入
 - 2 10YR3/1 黒褐色土 粘性中 線まり粗 25Y6/4 にぶい黄色土中～大粒5%～25Y7/8 黄色軽石7%混入
 - 3 25Y4/2 濃灰黄色土 粘性中 線まり粗 25Y6/4 にぶい黄色土大～中粒25%～25Y7/8 黄色軽石10%混入
 - 4 10YR2/1 黑褐色土 粘性中 線まり粗 25Y6/4 にぶい黄色土大～中粒40%～25Y7/8 黄色軽石10%混入
 - 5 10YR4/2 底黄褐色土 粘性強 線まり粗 25Y6/4 にぶい黄色土～10YR3/1 黑褐色土大～中粒50%～25Y7/8 黄色軽石3%混入
 - 6 10YR5/3 にぶい黃褐色土 粘性中 線まり粗 25Y6/4 にぶい黄色土中～中粒30%～25Y7/8 黄色軽石1%混入
 - 7 10YR6/4 にぶい黃褐色土 粘性強 線まり中 10YR6/4 にぶい黄色土小～中粒40%混入
 - 8 10YR6/4 にぶい黃褐色土 粘性強 線まり中 25Y6/4 にぶい黄色土小～中粒20%混入
 - 9 7.5YR5/4 にぶい黃褐色土 粘性強 線まり中 10YR6/4 にぶい黄色土小～中粒15%混入

第17図 溝状土坑TP4

4. 性格不明遺構

SX1 性格不明遺構（第11図、写真図版14）

H8-s-10 グリッドの中央、SK7-8 土坑の東側に位置する。平面不整梢円形、長軸42cm×短軸26cm の被熱範囲で、掘り込みは伴わない。切株直下に位置していたため、樹木根による侵食が著しく、抜根後の窪みの中に焼面が検出された。地山の被熱は弱く、部分的に5YR5/6 明赤褐色を呈し赤化する。範囲内及び周辺からの出土遺物はない。単なる被熱範囲であるため個別図は作成せず、本報告書では第11図の遺構配置図に位置を示す程度に留めた。

VII. 遺構外出土遺物

遺構外から出土した遺物は、縄文土器、石器である。全て表土もしくは調査区周辺の地表面で採集された遺物で、総量は小コンテナ(41cm×31cm×10cm)で1/2箱にも満たない。このうち、縄文土器21点、土製品1点を掲載対象とした。ただし、石器についてはいずれも剥片で、二次加工や微細剥離のある資料が殆ど認められなかつたことから、全て掲載対象外とした。なお、1点のみ二次加工が認められた剥片が存在するが、これも小片のため掲載対象外とした。

1. 縄文土器

出土した縄文土器は全て破片で、5cm未満の小片資料が大半を占める。ここでは、文様等の特徴から早期末葉～前期前葉と後期初頭～前葉の所産に分類し、底部資料・粗製土器は一括して報告する。

第1群：早期末葉～前期前葉に位置付けられる土器（第18図-1・2、第5表、写真図版14）

胎土に纖維を含む一群である。1・2はともに深鉢の破片とみられ、1には横位回転によるLR縄文、2には交互横位回転によるRL・LRの結束羽状縄文が施される。

第Ⅱ群：後期初頭～前葉に位置付けられる土器（第18図-3～12、第5表、写真図版14）

沈線文が文様構成の主体を占める一群である。6～12は1号堅穴住居跡直上の表土から出土しており、同住居跡への帰属性が濃く窺える。

3～11は深鉢もしくは鉢の破片とみられ、3～9が口縁部、10が胴部上位、11が胴部下位の破片である。12は、壺の胴部下位に相当する。沈線文は2条一組もしくは3条一組を基本とし、三角形状・満巻状・長方形状などの文様が施文される。口縁部形態は4・7が波状、5・6が小波状を呈する。4の口唇部頂部には、一对の山形突起がつく。

第Ⅲ群：粗製土器・底部資料（第19図-13～21、第5表、写真図版14）

折返口縁の土器、撚糸文施文土器、無文・縄文施文土器、底部資料に分類して掲載する。13～16、20・21は1号堅穴住居跡直上の表土から出土した。

第1類：折返口縁の土器（第19図-13）

13は、深鉢の口縁部破片である。折返部の外面には横位回転のL字縄文、同部には縱位回転のL字縄文が施文される。折返部の断面形状は、やや窪んでいる。

第2類：撚糸文施文の土器（第19図-14～17）

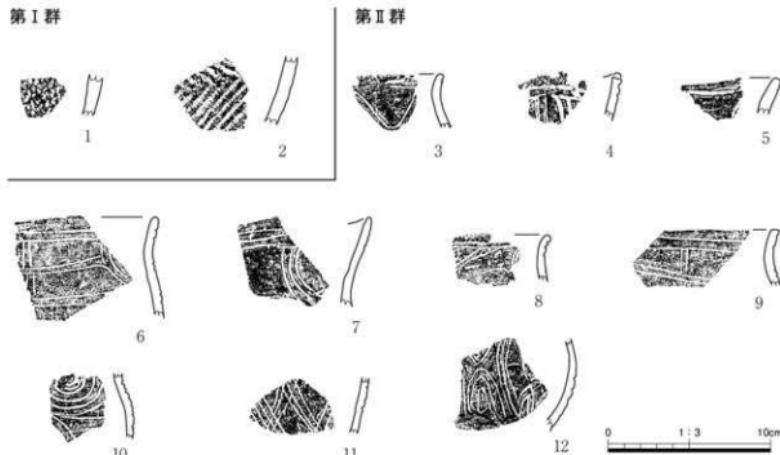
いざれも深鉢とみられ、14は口縁部、他は胴部破片である。14は折返口縁だが、文様の特徴を優先させ本類に含めた。14～16には、Rの網目状撚糸文が施文される。16の撚糸は、片方が2回軸棒に巻かれている。17には、rの撚糸文が施文される。

第3類：無文・縄文施文土器（第19図-18・19）

18は深鉢の口縁部破片である。全面にミガキが施され、ミガキの前に施文されたLR縄文が、僅かに残る。19は深鉢の胴部破片で、横位回転によるLR縄文が全面に施文される。

第4類：底部資料（第19図-20・21）

ともに深鉢の底部破片である。20の内面には煤が付着し、21の底部外面には木葉痕が認められる。復元底径は20が86cm、21が92cmである。



第18図 遺構外出土遺物 土器第I・II群

2. 土製品

第19図-22は、円盤状土製品である。深鉢の破片を転用したとみられ、2条一組の沈線文が渦巻状に施文される。外周は小刻みに打ち欠かれている。長径3.5cm×短径3.4cmの製品である。

第Ⅲ群

第1類



13

第2類



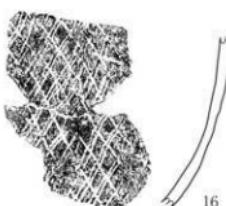
14



15



17



16

第3類

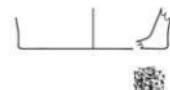


18



19

第4類



20



21



22

第19図 遺構外出土遺物 土器第Ⅲ群・土製品

1号竪穴住居跡

No	図版	写真	出土地点 層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面	内面	備考	分類
SI-1	12	9	床面	鉢・口縁部～側部	(7.5)	—	—	横位平行沈線文 沈線文	ナテ	小波状口縁 SI-2と同一個体か	Ⅲ
SI-2	12	9	床面	鉢・口縁部～側部	(7.0)	—	—	横位平行沈線文 沈線文	ナテ	小波状口縁 外面環付着 SI-1と同一個体か	Ⅲ

第5表 土器観察表(1)

土坑 SK1 ~ SK3・SK5

No	図版	写真	出土地点 層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面	内面	備考	分類
SK1 - 1	13	12	堆積土	深鉢・胴部	-	-	-	横位平行沈縞文	ミガキ	外面煤付着	II
SK2 - 1	13	12	堆積土	深鉢・胴部	-	-	-	L字縞文(横位)	ナデ		III
SK2 - 2	13	12	堆積土	深鉢・口縁部・胴部	-	-	-	R網目状撚糸文	ナデ	外面煤付着	III
SK3 - 1	13	12	堆積土	深鉢・底部	-	-	-	ナデ 木葉痕	ナデ		III
SK5 - 1	14	12	堆積土	深鉢・口縁部・胴部	(18.8)	-	-	刻目文 沈縞文(弧状・満巻状)	ナデ	波状口縁 外面煤・内面炭化物付着 SK5 - 2 と同一個体か	II
SK5 - 2	14	12	堆積土	深鉢・胴部	-	-	-	横位平行沈縞文 沈縞文(満巻状)	ミガキ	外面煤・内面炭化物付着 SK5 - 1 と同一個体か	II
SK5 - 3	14	12	堆積土	深鉢・胴部	-	-	-	R網目状撚糸文	ナデ	内面炭化物付着	III

遺構外

No	図版	写真	出土地点 層位	器種・部位	口径 (cm)	器高 (cm)	底径 (cm)	外面	内面	備考	分類
1	18	14	HS-h-9 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	L字縞文(横位)	ナデ	胎土中に織縞含	I
2	18	14	HS-420 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	R L・L字粘束羽状縞文 (互交横位置回転)	ナデ	胎土中に織縞含	I
3	18	14	GBs-b2 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	横位平行沈縞文 沈縞文(三角 形状)	ミガキ		II
4	18	14	GBs-p グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	沈縞文(横位・縦位)	ミガキ	波状口縁 口唇波頭部に一对の 山形突起 外面煤付着	II
5	18	14	GBs-x2 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	沈縞文(横位・斜位)	ナデ	小波状口縁	II
6	18	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	沈縞文(長方形状・満巻状)	ミガキ	小波状口縁 内外面炭化物付着りと 同一個体か	II
7	18	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	沈縞文(横位・満巻状)	ナデ	波状口縁	II
8	18	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	沈縞文(満巻状)	ナデ		II
9	18	14	GBs-17 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	沈縞文(長方形状)	ミガキ	内面煤付着 6 と同一個体か	II
10	18	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	沈縞文(満巻状)	ミガキ	外面煤付着	II
11	18	14	GBs-17 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	沈縞文(斜位)	ナデ		II
12	18	14	GBs-17 グリッド 表土	蓋・胴部	-	-	-	沈縞文(満巻状)	ケズリ →ナデ	内外縫隙付着	II
13	19	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	L字縞文(横位・縦位)	ミガキ	折嵩口縁	III
14	19	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	R網目状撚糸文	ナデ	折返口縁	III
15	19	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	横位平行沈縞文 R網目状撚 糸文	ナデ	外面煤付着	III
16	19	14	GBs-17 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	R網目状撚糸文	ナデ	糸系は片方が2回巻き	III
17	19	14	HS-424 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	r 穴文	ナデ	外面煤付着	III
18	19	14	HT-e-3 グリッド 表土	深鉢・口縁部	-	-	-	L字縞文(方向不明) →ミガキ	ミガキ		III
19	19	14	HBs-7 グリッド 表土	深鉢・胴部	-	-	-	L字縞文(横位)	ナデ		III
20	19	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・底部	-	(8.6)	ナデ		ナデ	内面煤付着	III
21	19	14	GBs-11-16-17 グリッド 表土	深鉢・底部	-	(9.2)	ナデ 木葉痕		ナデ	内面摩滅	III
22	19	14	GBs-p グリッド 表土	円錐状土製品	長3.5 厚3.4 厚0.7			沈縞文(満巻状)	ミガキ	第II群の深鉢破片転用	-

第5表 土器観察表(2)

VIII. 調査のまとめ

1. 遺構と遺構内出土遺物

(1) 堅穴住居跡

縄文時代の堅穴住居跡が1棟検出された。尾根の頂部付近に単独で立地し、残存するのは床面付近であったが、周溝・柱穴・炉跡といった付属施設が検出された。

出土遺物は、縄文土器18点が出土した。層位はいずれも床面付近で、住居跡と共に伴する遺物とみられる。掲載対象とした2点以外は大半が1~2cm程度の細片で、一部には7cm、16cmの大破片も認められたが、これらは無文のため掲載対象外とした。また、直上の表土からは本住居跡のものとみられる縄文土器41点、調片10点が出土した。土器は1~3cm程度の小片が殆どで、調片は6cm大のものが1点認められたほかは2~3cm程度の小片であり、二次加工や微細剥離は確認されず、いずれも掲載対象外とした。

掲載土器は、同一個体とみられる鉢2点である。小波状口縁を呈し、意匠不明の複雑な沈線文が施文される。後期初頭~前葉の所産とみられる。

(2) 土坑

土坑は11基検出された。遺物が出土した土坑はSK1~3・5の4基のみであったが、堆積土の層相などから全て縄文時代の土坑とみられる。平面形状は全て円形を基調とし、開口部の長軸規模はSK10の58cmを最小、SK4の183cmを最大として概ね130~150cm程度の土坑が主体である。断面形状は逆台形もしくはこれに近い形状を呈し、SK1・4・7・11のように壁の一部がオーバーハングする土坑もみられるが、いわゆる「フラスコ型」と呼べる程顕著ではない。大半の土坑が単独で斜面中腹に立地するが、SK2~4は尾根の頂部付近に立地するほか、4m程東側には1号堅穴住居跡が近接している。これらの位置関係から、SK2~4は同住居跡の屋外施設である可能性も考えられる。SK2・3号土坑から出土した縄文土器も、1号堅穴住居跡と同時期の所産である。

土坑内からの出土遺物は、SK1から縄文土器2点、SK2から縄文土器6点と調片1点、SK3から縄文土器3点、SK5から縄文土器6点と調片9点が出土した。SK5の遺物は、重複する1号堅穴住居跡のものであった可能性が高い。土器は、掲載対象とした6点を除けば1~2cm程度の小片が殆どである。調片については敲石等、礫石器の可能性も考えられたが、風化・剥落が激しく、掲載対象外とした。調片についても2次加工のある剥片が1点認められたものの、2cm程度の小片であるため掲載対象外とした。

掲載土器は、SK1から1点、SK2から2点、SK3から1点、SK5から3点を図示した。いずれも深鉢の破片で、SK1・1、SK5・1・2には平行沈線文や弧状・渦巻状の沈線文が施文される。SK5・1は波状口縁を呈し、口唇部頂部には刻目文が施文される。これらは、後期初頭~前葉の所産とみられる。SK2・1には縱目回転によるLR縄文、SK2・2及びSK5・3にはRの網目状捺糸文が施文される。

(3) 溝状土坑（陥し穴状遺構）

溝状土坑は4基検出された。陥し穴の性格が推定される土坑で、いずれも縄文時代に属すとみられる。平面形状は全て細長梢円形を呈する。開口部の長軸規模はTP1の282cmを最小に、TP3の309cm、TP4の325cm、TP2の361cmを最大とする。深さはいずれも110~120cm程度であり、極端な差は認められない。断面形状は、V字形、Y字形、逆台形のいずれかを呈する。立地は、TP1・3が斜面中腹、TP2が谷頭内、TP4が尾根の頂部付近に単独で掘り込まれている。長軸方向と等高線との関係は、TP1・2・4が直交、TP3が平行する。

溝状土坑内からの出土遺物はない。

(4) 性格不明遺構

性格不明遺構は、1基検出された。時期は不明であるが、自然科学分析の結果、270℃程度以下の低い熱量を受けている可能性が指摘された。出土遺物はないが、屋外炉の可能性も考えられる。

2. 遺構外出土遺物

(1) 縄文土器

今回の調査では、早期末葉～前期前葉、後期初頭～前葉の土器が出土した。出土量が多いのは、後者の土器である。早期末葉～前期前葉の土器は、胎土中に纖維が含まれる点を特徴とする。後期初頭～前葉の土器は、沈線文や網目状燃系文が施文される土器が主体で、無文や縄文施文の土器もある。沈線文は2条一組もしくは3条一組を基本とし、三角形状・長方形状・弧状・渦巻状と多様な文様が施文される。これらには十腰内1式に比定される土器が含まれると考えられるが、いずれも破片資料のため断定は避けたい。器種は深鉢がほとんどで、他は第18図-12の壺が1点認められたのみである。

(2) 土製品

円盤状土製品が、1点出土した。それ以外の土製品は出土していない。転用された土器の文様から、第Ⅱ群、後期初頭～前葉の所産とみられる。

3. まとめ

縄石遺跡は、平成29年に新規で発見された遺跡である。今回の発掘調査では、縄文時代の堅穴住居跡1棟、土坑11基、溝状土坑4基、性格不明遺構1基が検出された。遺物は、縄文土器、洞片などが出土した。堅穴住居跡は出土した土器から後期初頭～前葉に比定され、SK2～4など、堅穴住居跡の至近に位置する一部の土坑も時期的に並行する可能性がある。これらを含む、小規模な集落が営まれていたと考えられる。

<引用・参考文献>

- 青森県史友の会 2013 『青森県史 資料編 考古2 縄文後期・晩期』
青森市教育委員会 2006 『小牧野遺跡発掘調査報告書Ⅸ』 青森市埋蔵文化財調査報告書第85集
今村啓爾 1976 「縄文時代の陥穴と民族誌上の事例の比較」『物質文化』27 物質文化研究会
鈴木克彦 2001 「北日本の縄文後期土器編年研究」 雄山閣
種市町立歴史民俗資料館 2004 『種市町立歴史民俗資料館収蔵資料図録1 考古編』
田村壯一 1987 「陥し穴状遺構の形態と時期について」『(財)岩手県文化振興事業団埋蔵文化財センター紀要』VII
中村信博 1998 「溝型陥し穴研究序説」『柄木県考古学会誌』 柄木県考古学会
洋野町教育委員会 2013 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第1集
洋野町教育委員会 2015 『平内Ⅱ遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第2集
洋野町教育委員会 2017 『ゴッソー遺跡発掘調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第3集
洋野町教育委員会 2019 『西平内Ⅰ遺跡ハンドボーリング調査報告書』 洋野町埋蔵文化財調査報告書第4集

写 真 図 版



調査地遠景（北東より）



調査地遠景（南西より）

写真図版 1 調査地遠景



写真図版 2 調査地近景



G8 - b - 21 グリッド 全景 (東より)



G8 - I - 11・16・17 グリッド 全景 (南東より)



G8 - I - 11・16・17 グリッド 全景 (西より)



G8 - x - 2 グリッド 全景 (東より)



H8 - e - 6 グリッド 全景 (北より)

写真図版 3 調査区全景 (1)



H8-s-10 グリッド 全景（北東より）



H8-i-24 グリッド 全景（北東より）



H8-h-19 グリッド 全景（東より）



H8-f-8 グリッド 全景（東より）



H7-e-3 グリッド 全景（南より）

写真図版 4 調査区全景（2）



深掘土層序 A (G8 - b - 22 グリッド)



深掘土層序 B (H7 - e - 9 グリッド)

写真図版 5 深掘土層序



1号竪穴住居跡 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 検出状況（南より）



1号竪穴住居跡 床面施設 検出状況（南より）



1号竪穴住居跡 断面（南より）



1号竪穴住居跡 周溝 断面（南より）

写真図版 6 1号竪穴住居跡（1）



1号竪穴住居跡 遺物出土状況（北東より）



1号竪穴住居跡 遺物（SI1 - 1・2）出土状況（南より）



1号竪穴住居跡 Pit1 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit1 断面（南より）



1号竪穴住居跡 Pit2 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit2 断面（南より）



1号竪穴住居跡 Pit3 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit3 断面（南より）

写真図版 7 1号竪穴住居跡（2）



1号竪穴住居跡 Pit4 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit4 断面（南より）



1号竪穴住居跡 Pit5 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit5 断面（南より）



1号竪穴住居跡 Pit6 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit6 断面（南より）



1号竪穴住居跡 Pit7 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit7 断面（西より）

写真図版 8 1号竪穴住居跡 (3)



1号竪穴住居跡 Pit8 完掘（南より）



1号竪穴住居跡 Pit8 断面（南より）



1号竪穴住居跡 炉 完掘（南より）



SII - 1 SII - 2

0 1 : 3 10cm

1号竪穴住居跡 出土遺物



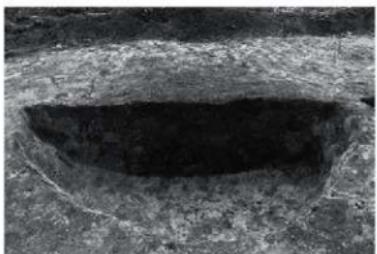
土坑 SK1 完掘（南西より）



土坑 SK1 断面（南東より）



土坑 SK2 完掘（南東より）



土坑 SK2 断面（北東より）

写真図版 9 1号竪穴住居跡 (4)・土坑 SK1・SK2



土坑 SK2 ~ SK4 完掘（南より）



土坑 SK3 完掘（北西より）



土坑 SK3 断面（北東より）

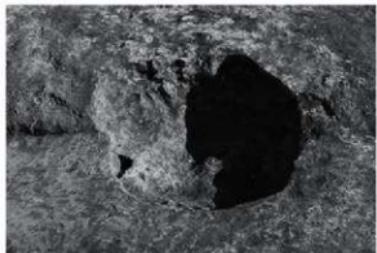


土坑 SK4 完掘（南より）

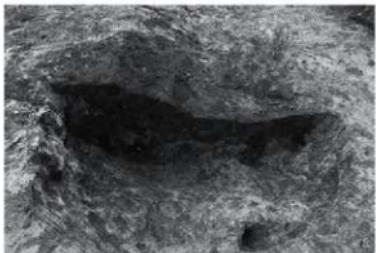


土坑 SK4 断面（南より）

写真図版 10 土坑 SK2 ~ SK4



土坑 SK5 完掘（北西より）



土坑 SK5 断面（北東より）



土坑 SK6 完掘（北より）



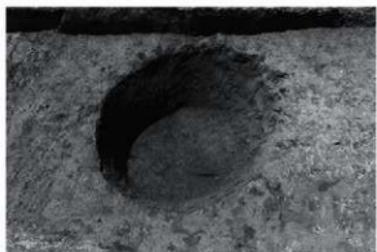
土坑 SK6 断面（東より）



土坑 SK7 完掘（北より）



土坑 SK8 完掘（西より）



土坑 SK9 完掘（北東より）



土坑 SK9 断面（南東より）

写真図版 11 土坑 SK5 ~ SK9



土坑 SK10 完掘（南東より）



土坑 SK10 断面（南東より）



土坑 SK11 完掘（北東より）



土坑 SK11 断面（南東より）



SK1-1



SK2-1



SK2-2



SK3-1



SK5-1



SK5-2



SK5-3



写真図版 12 土坑 SK10・SK11・土坑出土遺物



溝状土坑 TP1
完掘
(東より)



溝状土坑 TP1
断面
(東より)



溝状土坑 TP2
完掘
(北東より)



溝状土坑 TP2
断面
(北東より)

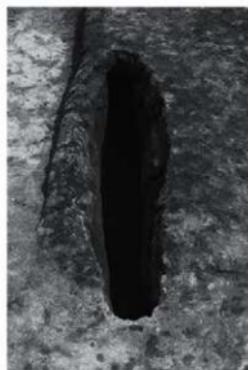


溝状土坑 TP3
完掘
(北東より)



溝状土坑 TP3
断面
(北東より)

写真図版 13 溝状土坑 TP1 ~ TP3



溝状土坑 TP4
完掘
(南西より)



溝状土坑 TP4
断面
(南東より)



性格不明遺構 SX1 完掘 (北より)

第Ⅲ群

第1類



第3類



第2類



17

0 1:3 10cm

遺構外出土遺物

- 62 -

第Ⅰ群



第Ⅱ群



第4類



21

土製品



22

0 1:2 5cm

写真図版 14 溝状土坑 TP4・性格不明遺構 SX1・遺構外出土遺物

報告書抄録

ふりがな	つづくいしいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	統石遺跡発掘調査報告書
調書名	太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査
卷次	
シリーズ名	洋野町埋蔵文化財調査報告書
シリーズ番号	第6集
編著者名	千田政博 吉澤 学
編集機関	洋野町教育委員会 株式会社シン技術コンサル
所在地	〒028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市23-27 TEL 0194-65-2111
発行年月日	2019年10月18日

ふりがな	ふりがな	コード		北緯	東經	調査期間	調査面積	調査原因
		所在地	市町村					
統石遺跡	岩手県九戸郡洋野町種市第4地割 99番1	03507	IF79-0012	40° 21' 21"	141° 44' 34"	20190404 ~ 20190426	約448m ²	太陽光発電所建設工事

所取遺跡名	種別	主な時代	主な遺構	主な遺物	特記事項
統石遺跡	集落跡 狩獵場跡 散在地	縄文時代	堅穴住居跡 1棟 土坑 11基 溝状土坑 4基 性格不明遺構 1基	縄文土器 剥片	縄文土器は早期末葉～前期前葉、後期初頭～前葉が中心。

洋野町埋蔵文化財調査報告書第6集
続石遺跡発掘調査報告書

太陽光発電所建設工事に伴う遺跡発掘調査

印刷 令和元年10月15日

発行 令和元年10月18日

発行 洋野町教育委員会
〒028-7914 岩手県九戸郡洋野町種市23-27
TEL (0194) 65-2111

印刷 株式会社仙台紙工印刷
〒983-0036 宮城県仙台市宮城野区苦竹3丁目1-14
TEL (022) 231-2245
